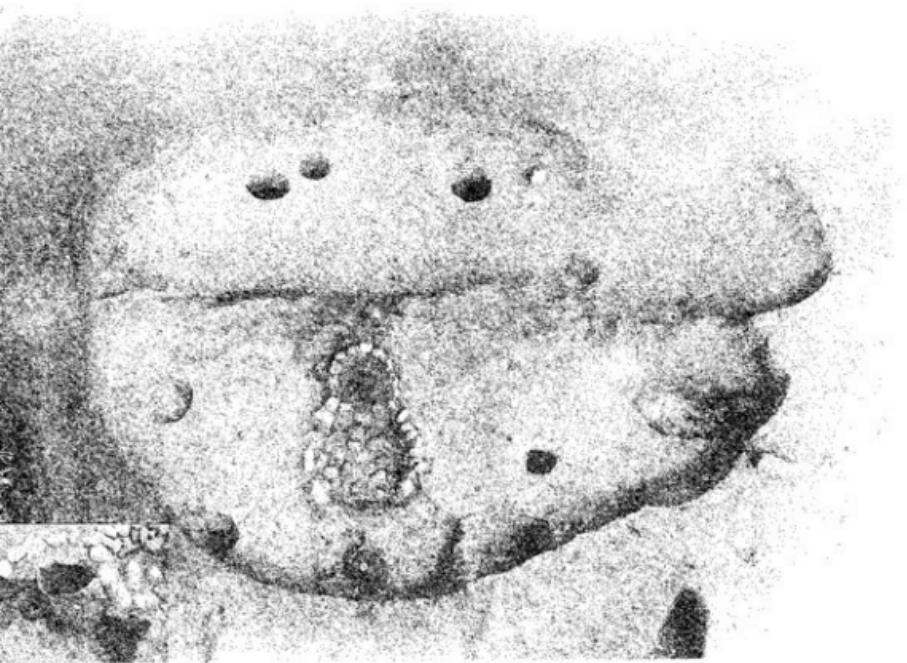
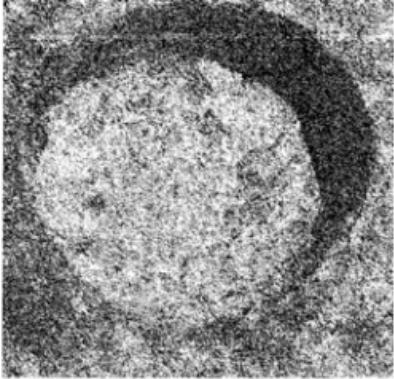


5号住居跡（南→）



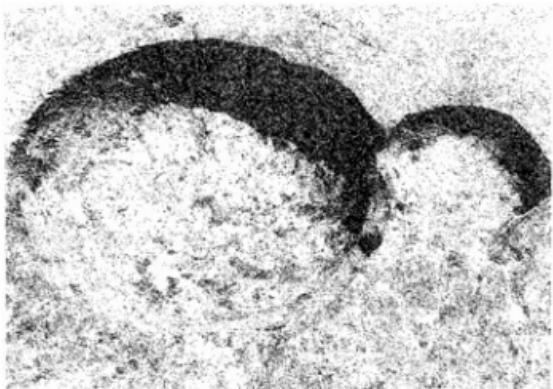
6号住居跡（南→）



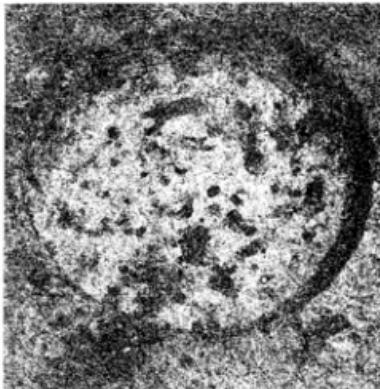
1号土塚（西→）



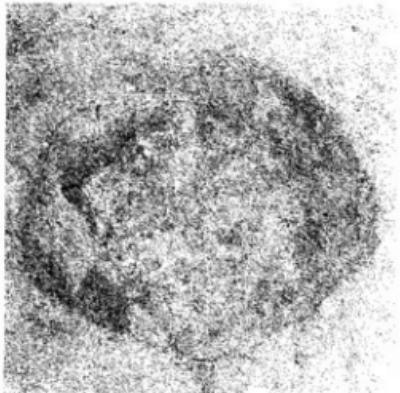
4号土塚（南→）



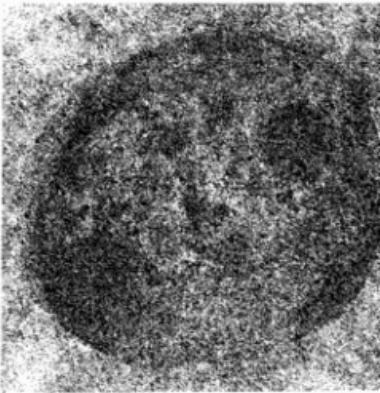
7号土塚（北→）



8号土塚（南→）



10号土塚（南→）



13号土塚（東→）



1号住居跡出土



6号住居跡出土



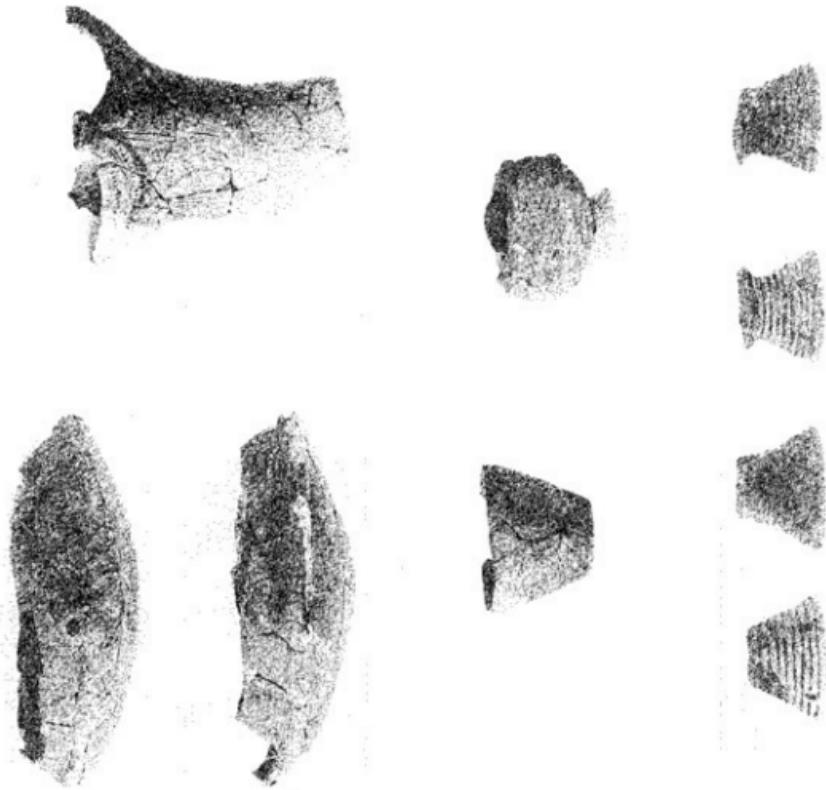
遺構内出土土器

4号住居跡出土

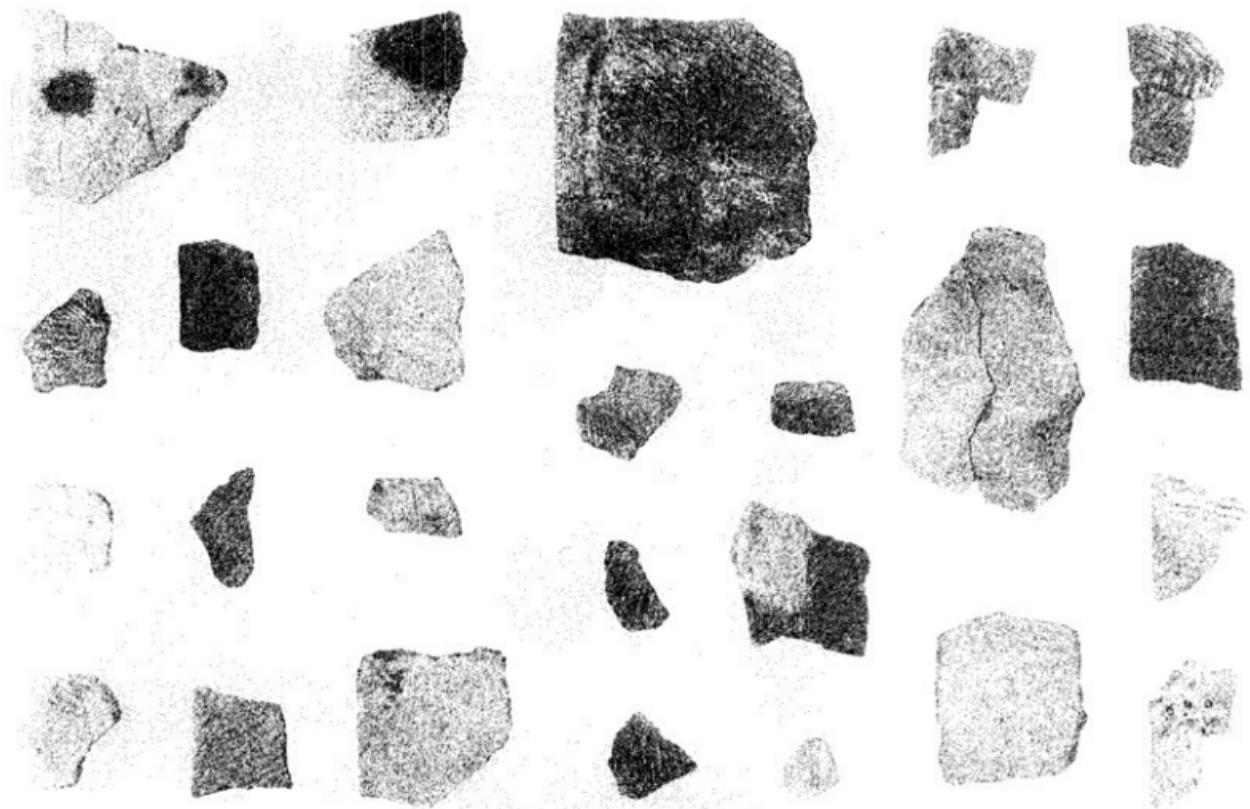


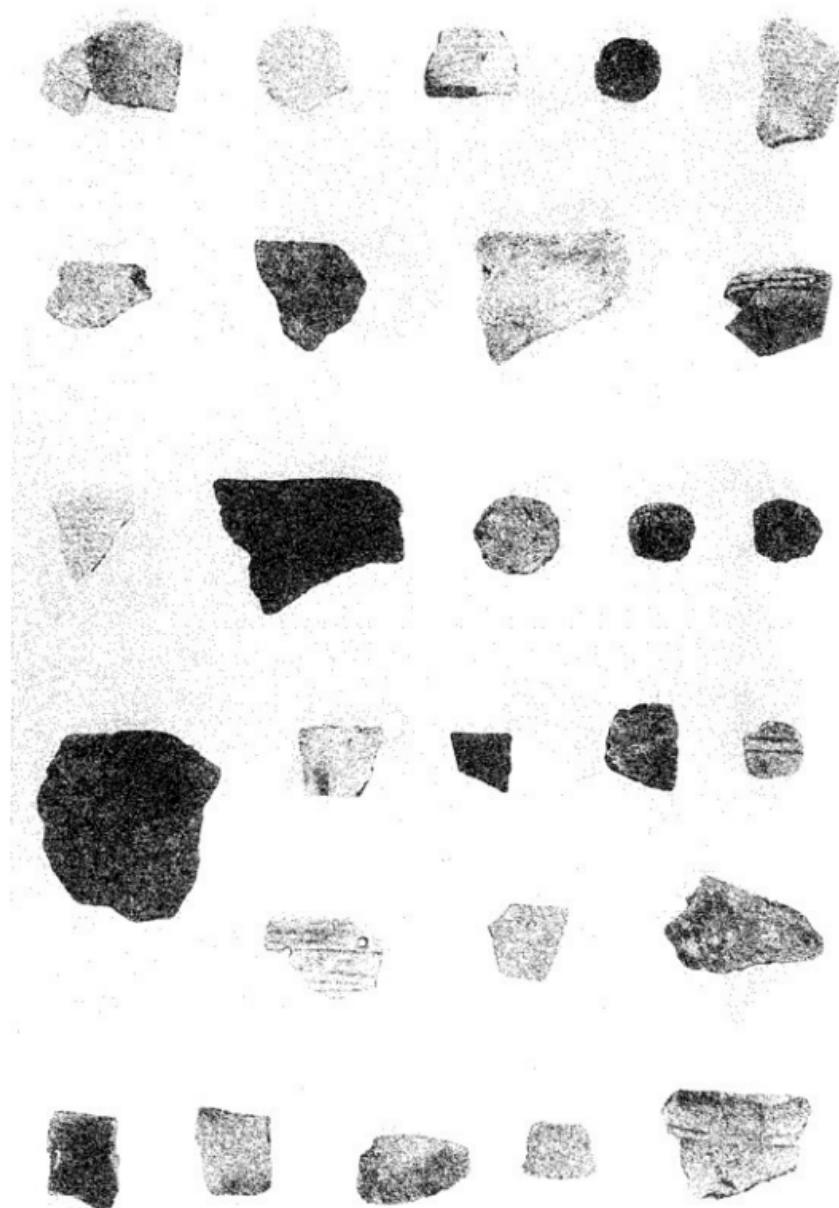
遺構外出土土器

圖版 7 遺構外出土土器

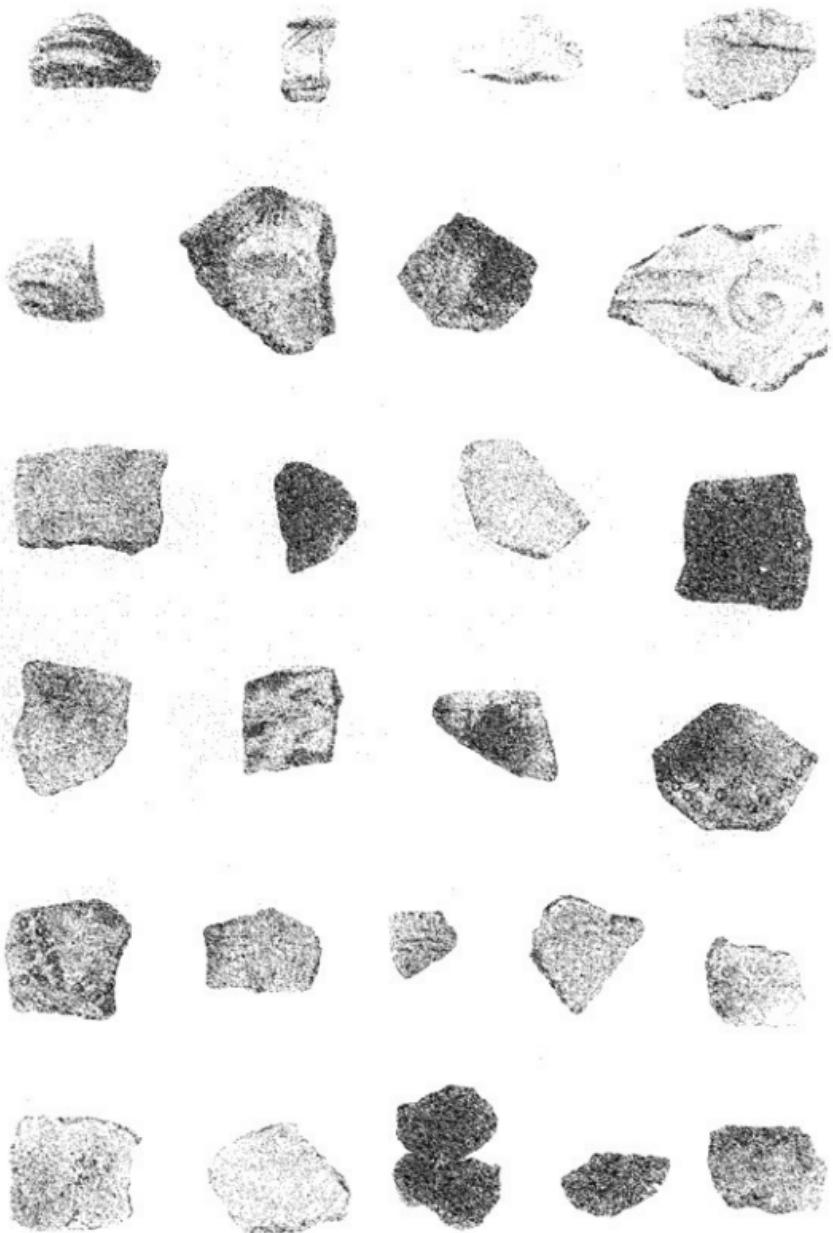


圖版 8 遺構內出土土器





図版9 遺構内出土土器



图版10 通沟外出土土器

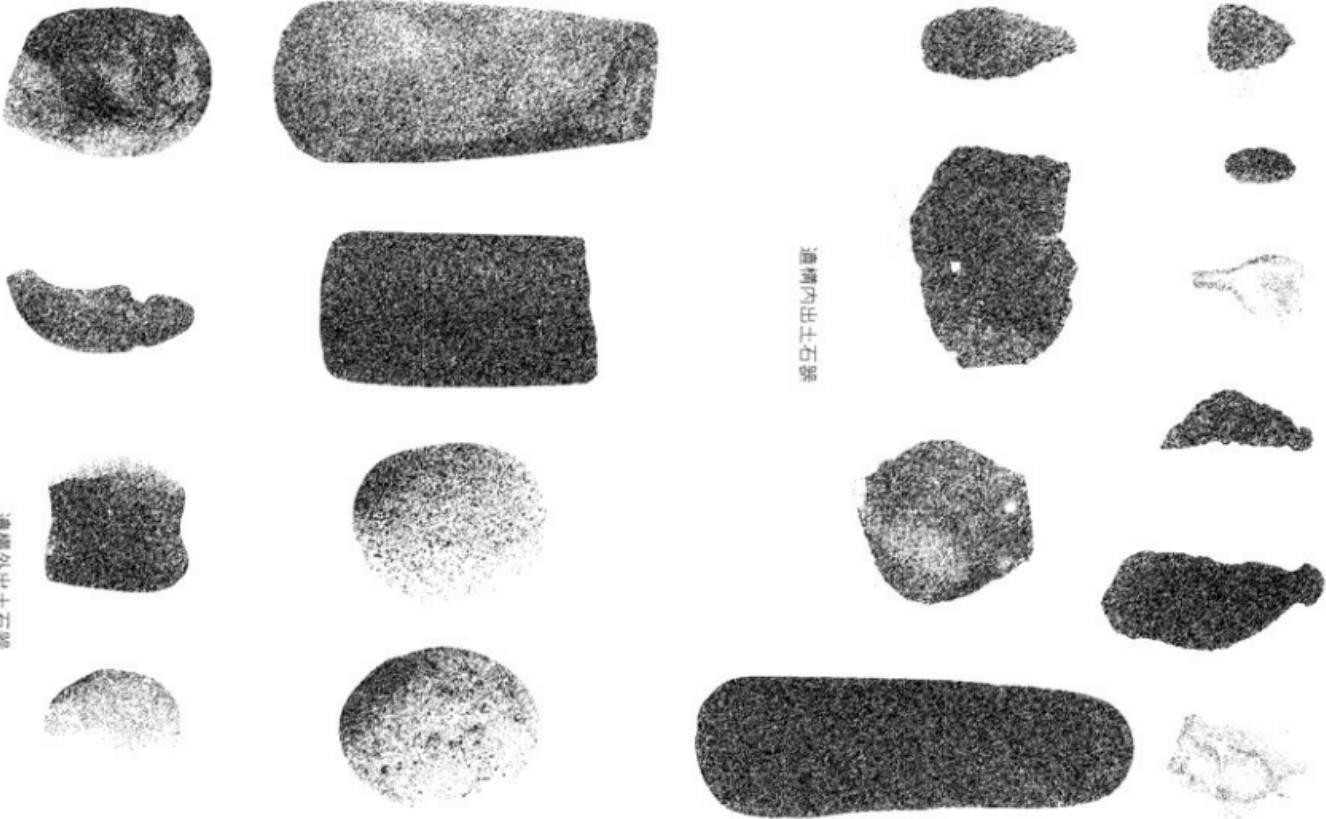


図版11 遺構外出土土器

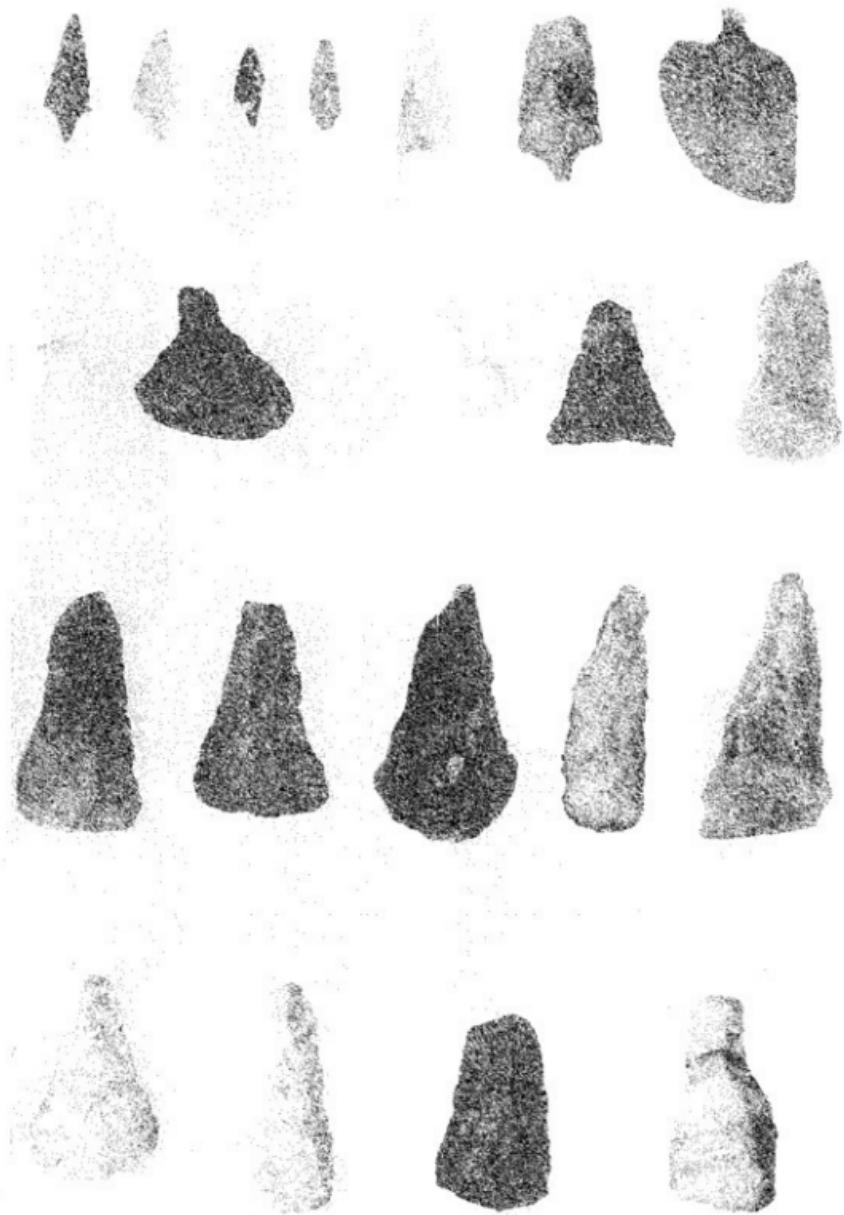


圖版12 造構外出土土器

遺構外出土石器



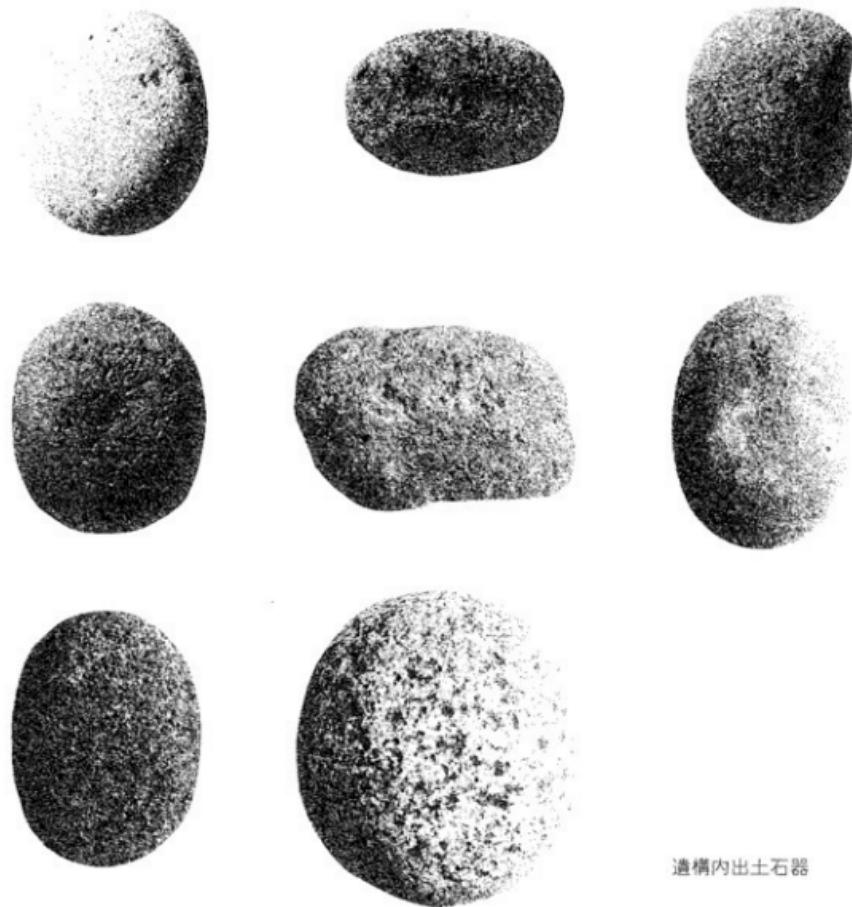
遺構内出土石器



図版14 遺構外出土石器



圖版15 造構外出土石器



遺構内出土石器



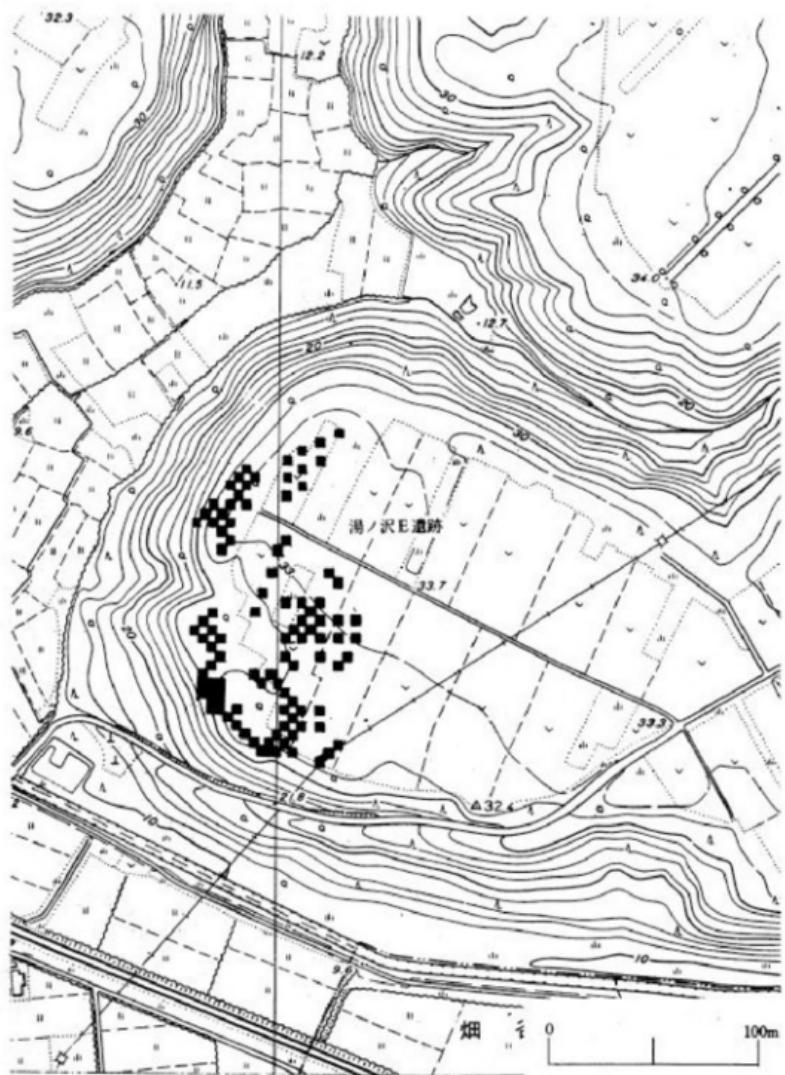
図版16

遺構外出土石器

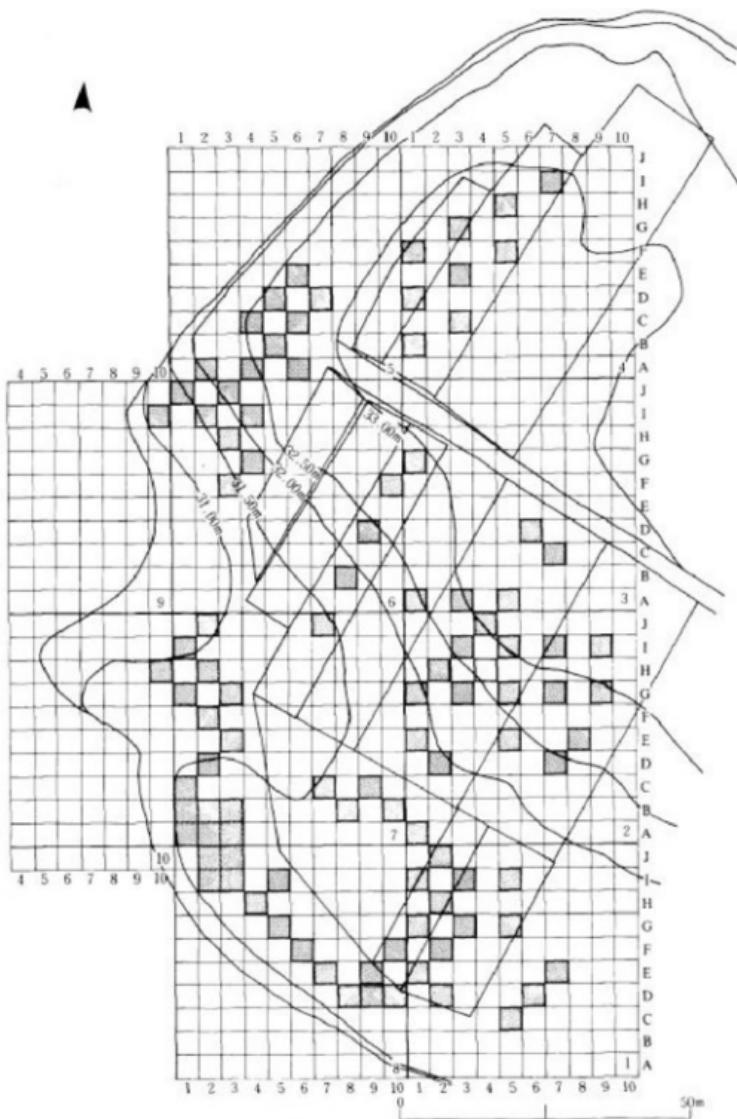


遺構外出土石器

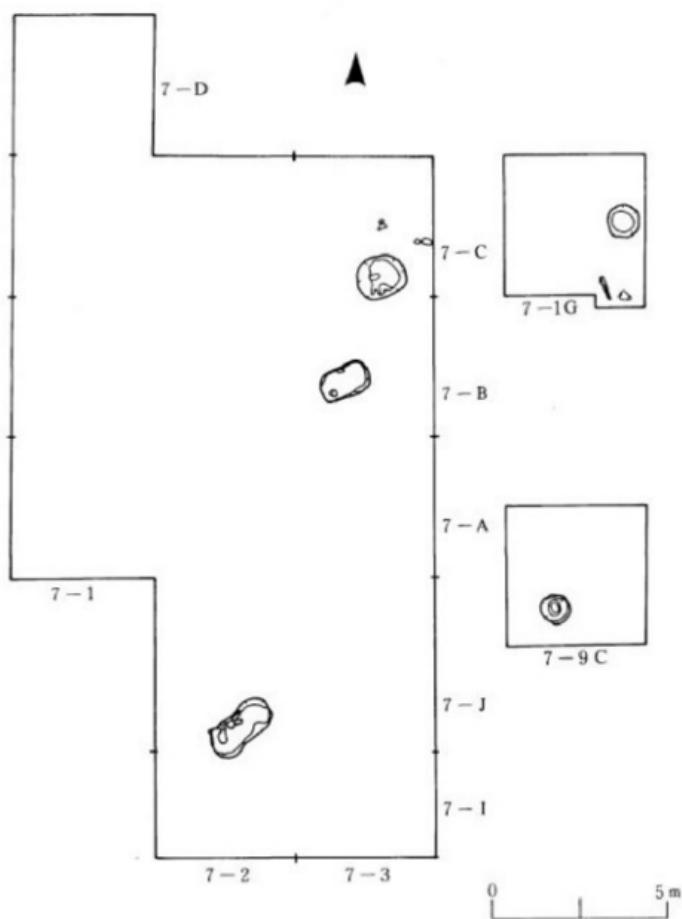
湯ノ沢 E 遺跡



第1図 遺跡周辺の地形



第2図 グリッド配置図



第3図 透構配置図

遺跡の概観

末戸松本から東方約400m の標高31~33m の西方に突き出す舌状台地上に位置する。

発掘調査は、昭和57年度に実施した、範囲確認調査の結果に基づいて 4m グリッドを千鳥に発掘し、遺構の確認と共に拡張することにして、120グリッドを調査した。結果、出土遺物も非常に少なく、明確な遺構の検出もなかった。わずかに土塙、石組遺構一ヶ所を確認したにすぎない。

遺構と遺物

土塙（第3図）

7-1C・Gグリッドで径約0.9m 、深さ約0.7m の土塙を検出した。また、7-2・3~I・J・A~Cグリッドでは、径約1.3m 、深さ0.3m の円形の土塙1基、長径1.5~2m の長円形を呈する土塙2基を検出した。いずれも出土遺物はなく時期については不明である。

石組遺構（第3、4図）

7-1Gグリッドで検出した。扁平な砾を組み、上部を横置している。

出土土器（第5図）

底径14cm 、現存高34cm の深鉢形土器である。

地文は撚糸文であるが、原体は非常に弛緩している。中央部から上方に細い沈線で文様を描いている。網代底である。

遺構外出土土器（第6、7図）

1・2は沈線で区画した無文階の部分に左方向から刺突文を施している。地文はR Lの単節斜繩文である。3~6は沈線を主体に文様を描く。繩文後期初頭の土器である。7・8は晩期の土器片である。

遺構外出土石器（第8、9図）

石匙（1~5）1・2は縦型石匙、3~5は横型石匙である。打面はツマミ部の上にあり、抉りの部分は両側から剥離が施される。すべて頁岩である。

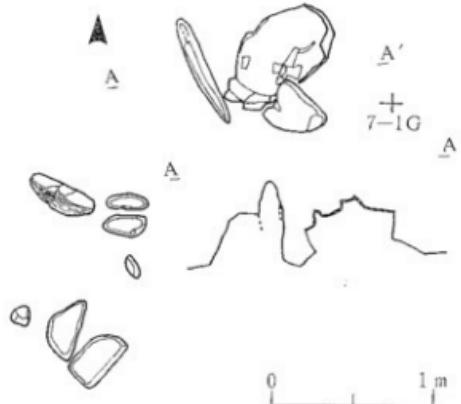
削器（6）打面は上面にある。側縁に細かい剥離を施している。頁岩である。

撃器（7~9）8は両側縁と下部、9は両側縁に細かい剥離を施し刃部を作出している。

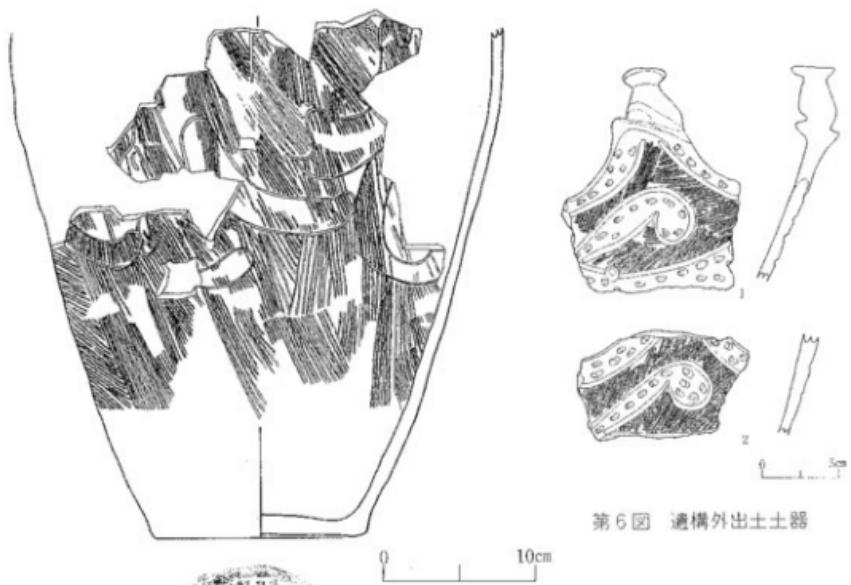
くぼみ石（10）長い縫にくぼみ2個を加工している。

石鎌（11）鍔の両端を打ち欠いて作っている。安山岩である。

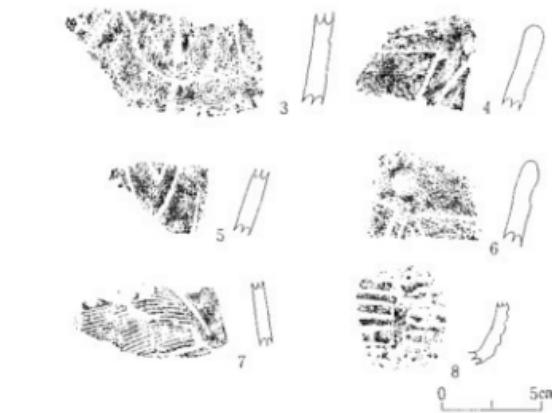
磨石（12）中央がきれいに磨かれている。



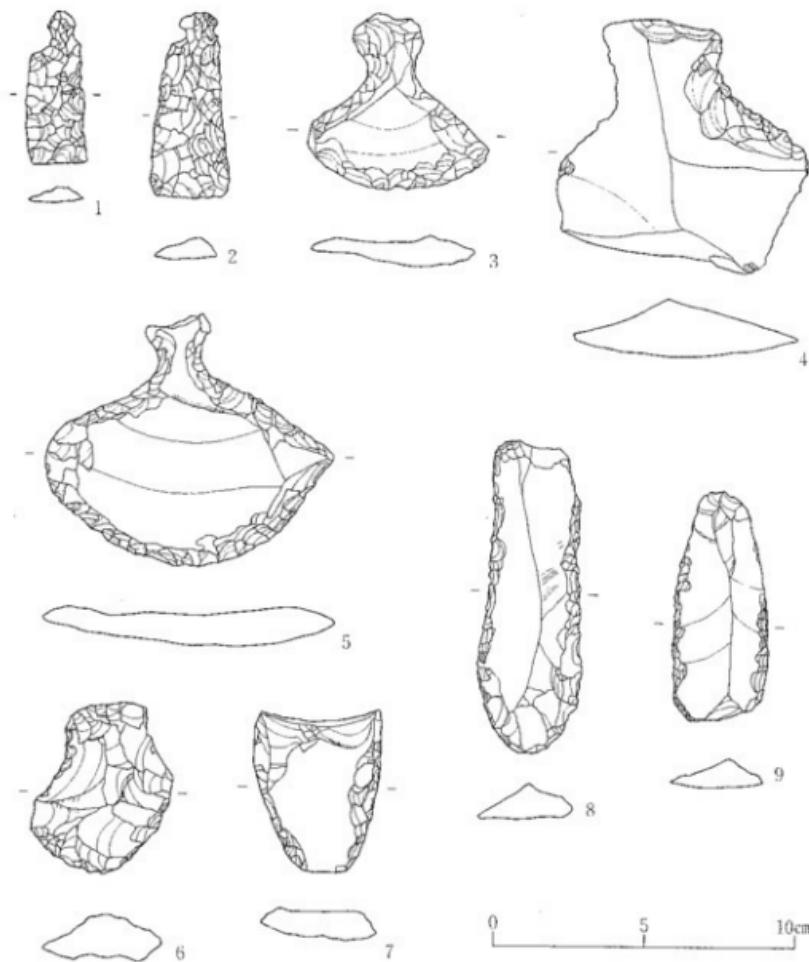
第4図 石組遺構



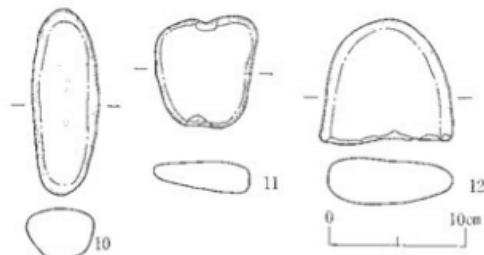
第5図 出土土器



第6図 遺構外出土土器



第8図 遺構外出土石器



第9図 遺構外出土石器

まとめ

湯ノ沢E遺跡では、結果的に良好な遺構の広がりは検出できなかった。しかし、このことは範囲確認調査の資料に基づくとある程度予測したことである。

昭和57年度に本台地の先端、両側縁部にトレンチを設定し調査を実施した結果、少量の遺物採集しかできず、遺構は検出できたとしても非常に少ないと考へていた。

簡単に述べることはできないが、本遺跡は範囲確認調査結果と遺跡規模がある程度一致した良好な例であり、今後遺跡規模を推測する目録となるであろう。



遺跡全景 (西→)



調査グリッド (北→)

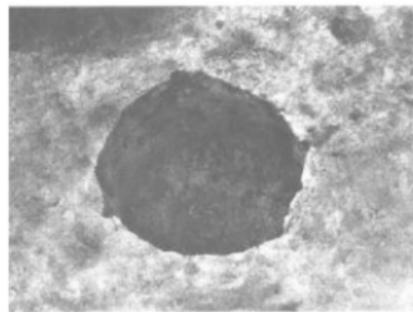
図版 1



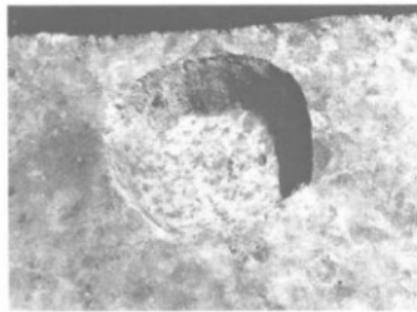
土 塚 (東→)



石組通構 (東→)



土 塚 (北→)

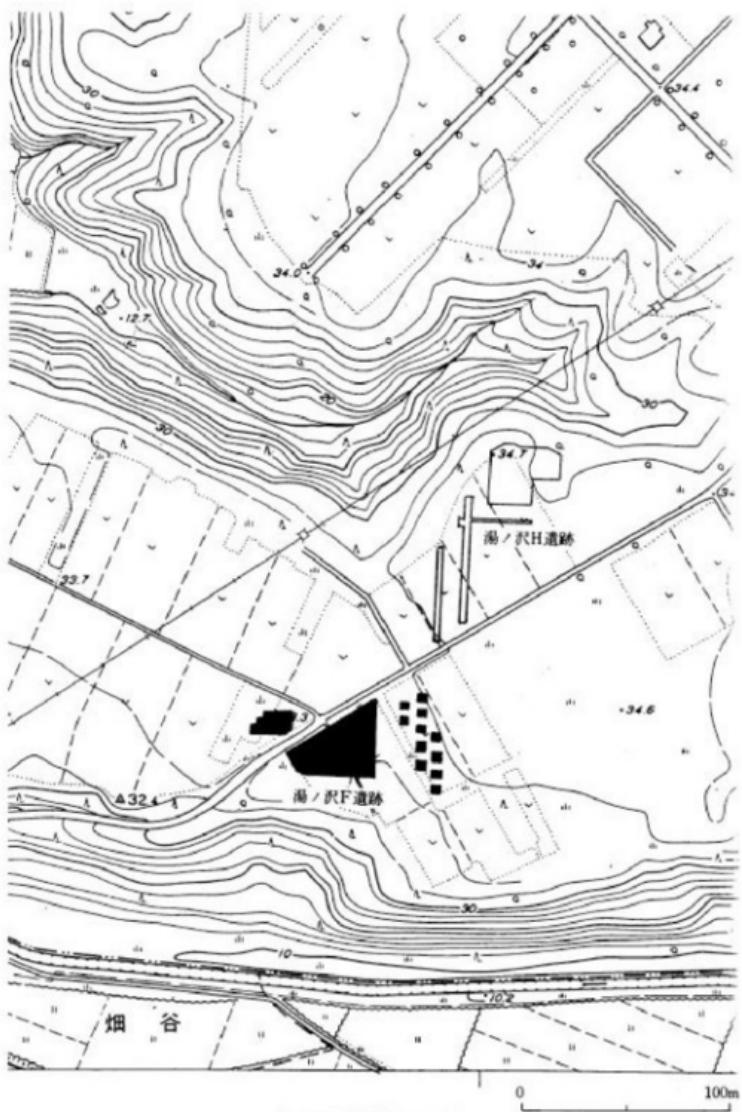


土 塚 (北→)

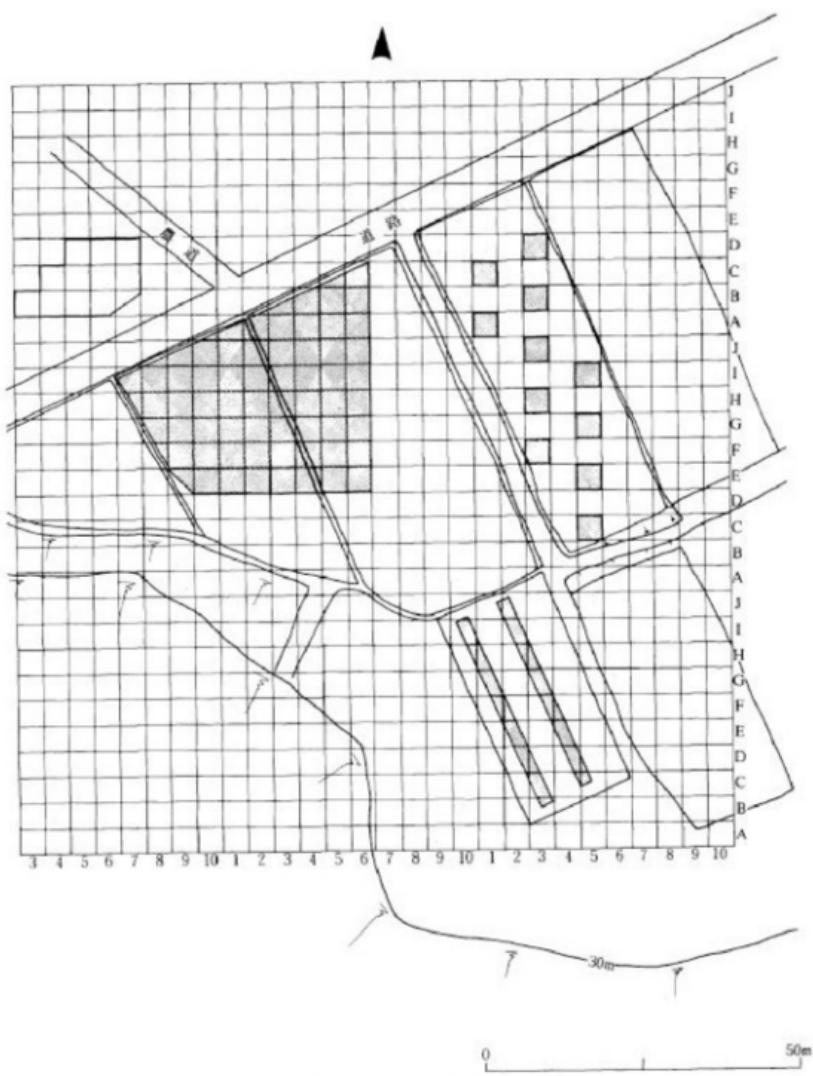


圖版3 通橫外出土遺物

湯ノ沢 F 遺跡



第1図 遺跡周辺の地形



第2図 グリッド配置図

遺跡の概観

末戸松本集落から東に約400mの標高32mほど西に張り出す舌状台地の付根部分に位置する。遺跡は、昭和57年度に実施した範囲確認調査で赤褐色土器片、鐵刀が出土しており、その範囲を中心にグリッドを設定して調査を行った。結果、溝状土塁1基、平安時代の土塙墓21基、遺物は土塙墓の副葬品である須恵器、赤褐色土器、鐵製品、銅製品が出土した。

遺構と遺物

土塙墓

土塙墓は今回の調査で21基を検出した。いずれも表土下の第二層褐色土からの掘り込みである。数基は烟の畠、溝により搅乱を受けている。以下表にしてまとめた。

出土遺物

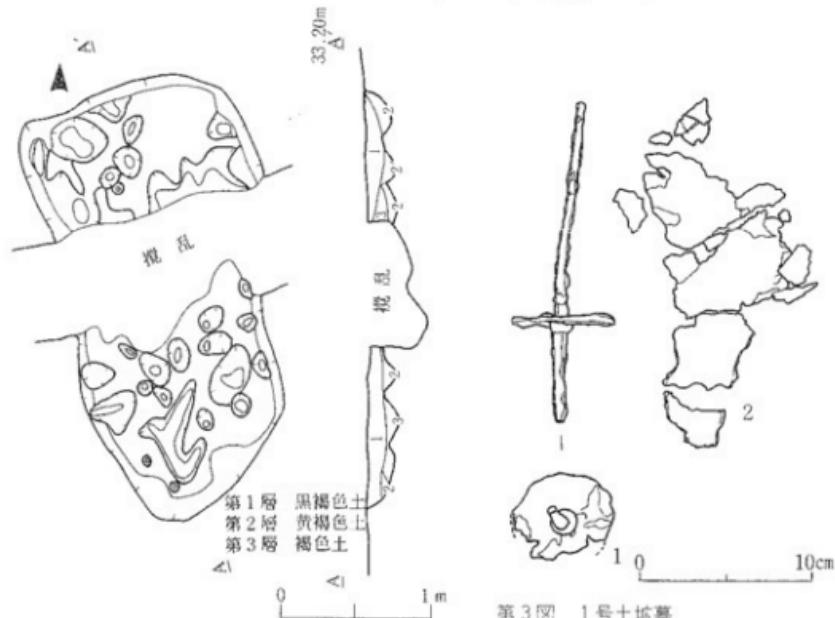
1号土塙墓出土遺物（第3図）

鉄製品 紡錘車は紡輪径5.9cm、紡茎長18.7cmを計るが、端部は一部欠損する。全体に銹化が著しい。

漆器 2は漆皮である。動物の皮（牛・鹿？）に布を貼り、漆で塗りかためたものである。布目の荒い断片が出土した。

2号土塙墓出土遺物（第5図）

土器 1は底部切り離しが静止糸切りの須恵器坏である。再調査はない。



第3図 1号土塙墓

土 塚 墓 一 覧 表

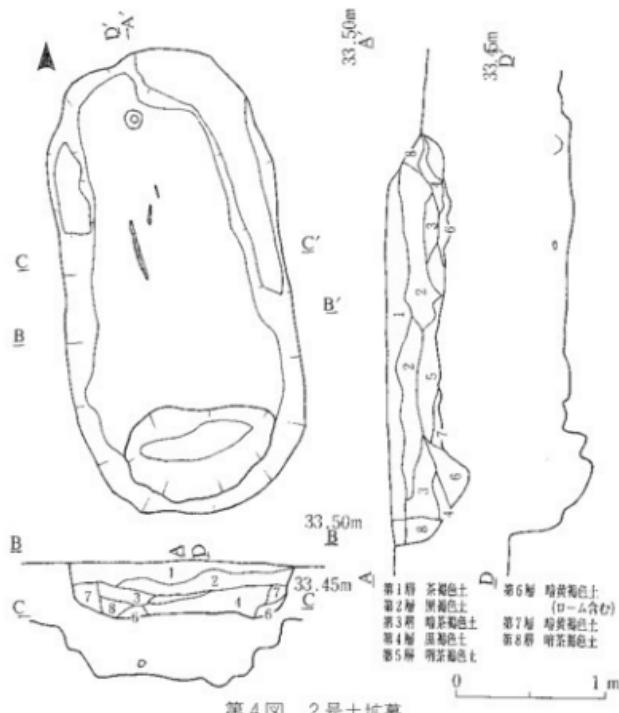
項目 土塚番号	規 模 (m) (長軸×短軸)	深 さ (m)	長 軸 方 向	形 状	骨	副 鮮 品	備 考
1号土塚墓	2.74×1.24	0.20	N 11° W	隅丸長方形		漆皮、筋鍊車	中央部、溝により擾乱。
2号土塚墓	3.1 ×1.44	0.34	N 8° W	長 円 形		須恵器、鉄刀、刀子	
3号土塚墓	3.56×1.26	0.44	N	隅丸長方形		赤褐色土器、鉄刀、鐵鏡、馬具	木棺の痕跡あり、幅70cm、長さ2.7m
4号土塚墓	2.98×1.23	0.32	N 32° W	隅丸長方形		赤褐色土器環、鉄刀1、刀子2、鉄鏡1	木棺の痕跡あり、幅68cm、長さ不明
5号土塚墓	3.08×1.42	0.28	N 15° W	隅丸長方形		刀子1、鉄鏡9点以上	北側擾乱
6号土塚墓	2.76×1.12	0.26	N 19° W	隅丸長方形		漆皮箱、馬具	
7号土塚墓	3.0 ×1.2	0.32	N 16° W	隅丸長方形	骨 片	内黒土器器、鐵鏡、鉄刀1、不明鉄製品	鉄刀に骨片付着
8号土塚墓	3.1 ×1.4	0.18	N 13° W	隅丸長方形		赤褐色土器環、鉄刀1、刀子	北部擾乱
9号土塚墓	2.2 ×1.34	0.24	N 1° W	長 円 形		赤褐色土器片	南、北西部擾乱
10号土塚墓	2.56×1.02	0.74 (最深部)	N 2° W	長 円 形		赤褐色土器環	木棺の痕跡あり、幅70cm、長さ1.8m
11号土塚墓	1.46×0.94	0.30	N 26° W	長 円 形			
12号土塚墓	2.94×1.1	0.30	N 8° E	隅丸長方形			
13号土塚墓	2.1 ×1.94	0.40	N	隅丸長方形		刀子、筋鍊車	
14号土塚墓	2.9 ×1.7	0.20	N10°30'W	隅丸長方形		赤褐色土器環、鉄刀、刀子	北側擾乱
15号土塚墓	4.10×1.48	0.18	N 1° W	隅丸長方形		刀子	
16号土塚墓	3.64×1.06	0.14	N 24° W	隅丸長方形		内黒土器器、鉄刀、鐵鏡、鐵ヶマ、鋏先、不明鉄製品、搭金具、鉄貨	上部削平
17号土塚墓	3.64×1.3	0.35	N 8° E	隅丸長方形		鐵鏡	上部削平
18号土塚墓	1.94×0.68	0.10	N 1° W	隅丸長方形			上部削平
19号土塚墓	2.1 ×0.66	0.10	N 18° W	長 円 形		鉄刀1、刀子1	上部削平
20号土塚墓	3.0 ×1.1	0.24	N 16° E	隅丸長方形		赤褐色土器、刀子	木棺の痕跡あり、幅50cm、長さ2.2m
21号土塚墓	2m以上×0.9	0.26	N	隅丸長方形		赤褐色土器、刀子、筋鍊車	南側土手のため不明

鉄製品 鉄刀 (4)：全長40.5cm、身幅3.3~3.7cm、刀身約34cmを計る。刃は不明である。錆化が著しく、刃の部分は大きく膨らんでいる。部分的に木質部が残っている。

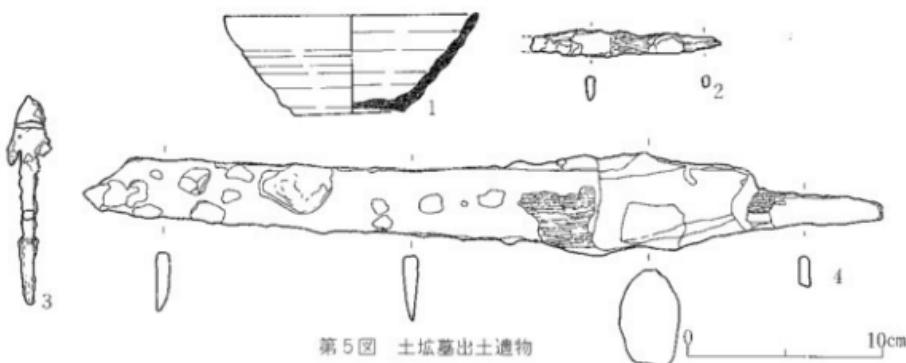
刀子(2)：長さ9.2cmを計る。切先部分は欠損する。茎には木質部が残っている。鉄鎌(3)：長さ11.2cmを計る。身の先端は扁平で両側に逆刺がある。有茎で、茎には木質部が残っている。

3号土塙墓出土遺物 (第7図)

土器 赤褐色土器(1・2)
：南側から2点出土した。いずれも回転糸切り無調整であ

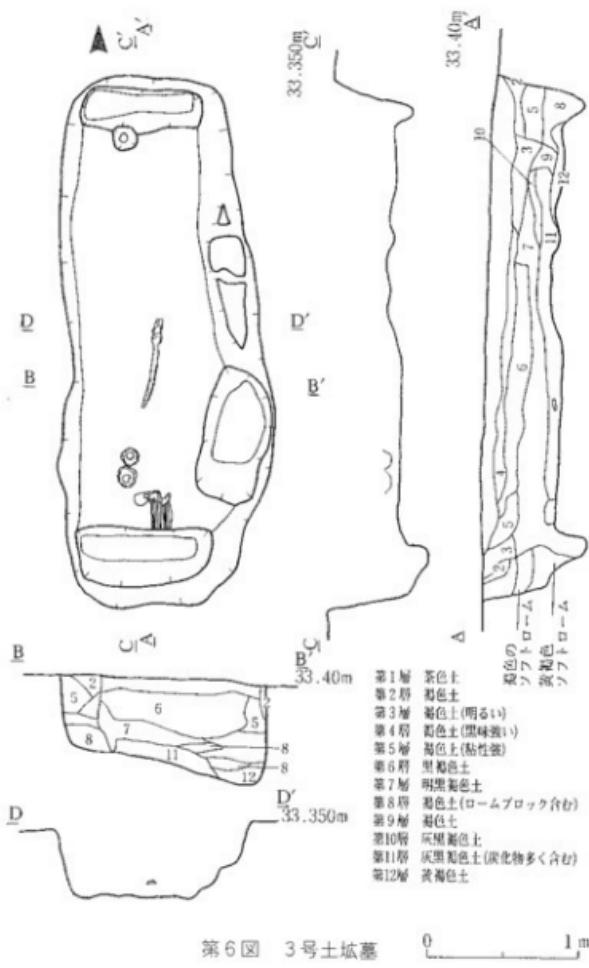


第4図 2号土塙墓



る。1の底部にはヘラ描きがあるが判読できなかった。

鉄製品 鉄刀(39)：現長61.2cm、身幅3.1~4.3cm、刀身45.3cmを計る。茎は一部欠損する。脛金をもち鈎がつく。切先は「ふくらつく」である。錆化しているが遺存状態は良い。刀子(3)：現長15.2cmを計る。切先は「ふくらつく」である。鉄鎌(4~34)：南側からまとめて出土した。図示した30点の他にも出土しているが小破片が多い。すべて有茎で、最長のものは約19cmを計る。身先



第6図 3号土塚墓

0 1m

端の形は二等辺三角形状に尖る細身のもので、逆刺のあるもの（7～14）、叩きつぶして扁平にしたもの（4～6・15～18）と、やや大形で三角形を呈し、逆刺のつくもの（31・32）の大きく三タイプに分けられる。茎には木質部の残るものが多くみられ、特に5・12・25～28は織維（糸？）を巻きつけ漆状のもので塗りかためているようである。馬具（35～38）：馬具のうち櫛部の銜（35・36）と鏡板（37・38）と思われる。

4号土塚墓出土遺物（第9図）

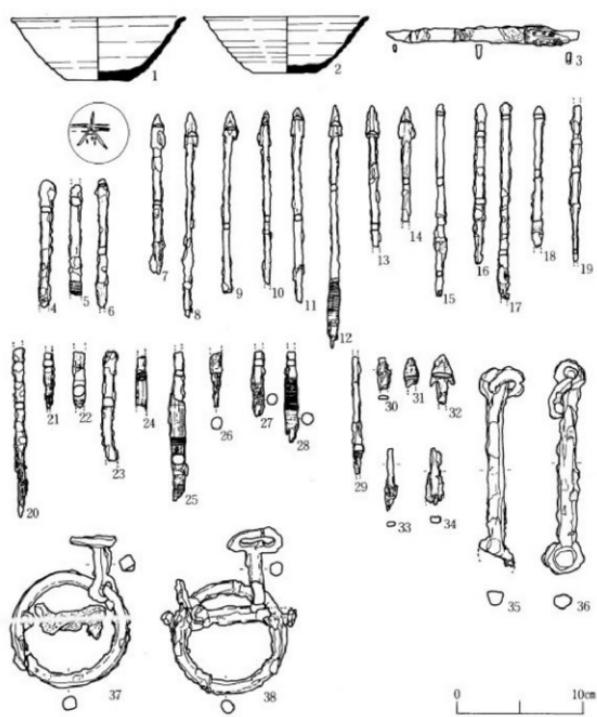
土器 赤褐色土器（1）：回転糸切り無調整の壺である。胎土はもろく肌色を呈する。

鉄製品 鉄刀（5）：現長34.3cm、身幅3.2cm～4.2cm、刀身約31cmを計る。茎の部分は一部欠損する。区は両刃のようである。切先は「ふくらつく」である。錆化が著しいが遺存状態は良い。刀子（3～4）：2点出土した。2は長さ12cmを計るが切先部分は欠損する。

茎に木質部が残る。鐵鎌（2）：現長4.5cmである。茎にはきれいに織維（糸？）が巻かれている。

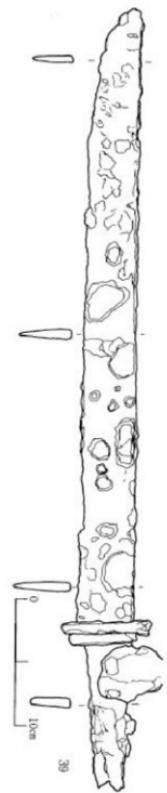
5号土塚墓出土遺物（第10図）

鉄製品 刀子（1）：刀身12.4cmを計る。茎は欠損する。鐵鎌（2～10）：破損品である。2～4は身の先端部を扁平に叩き、鋭利にしている。5は茎の部分である。久柄と思われる木質が残り、端部に織維（糸？）をきれいに巻いている。茎に木質が残るものが多い。



0 10cm

第7図 3号土塙基出土遺物

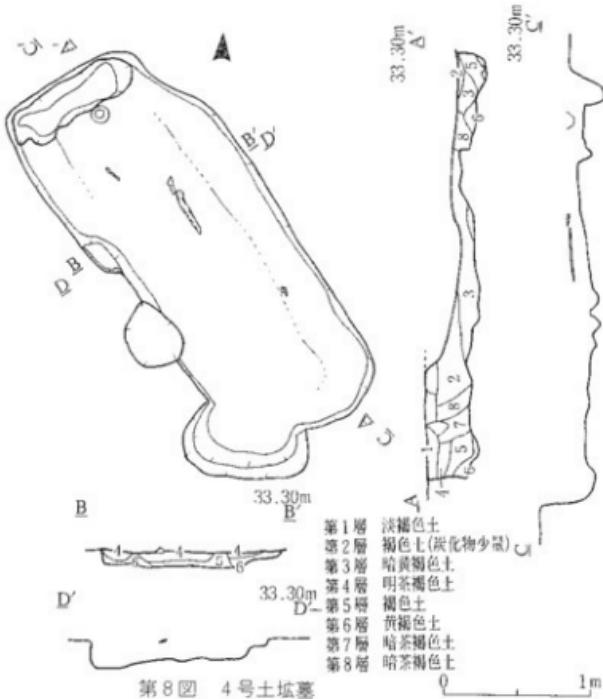


8

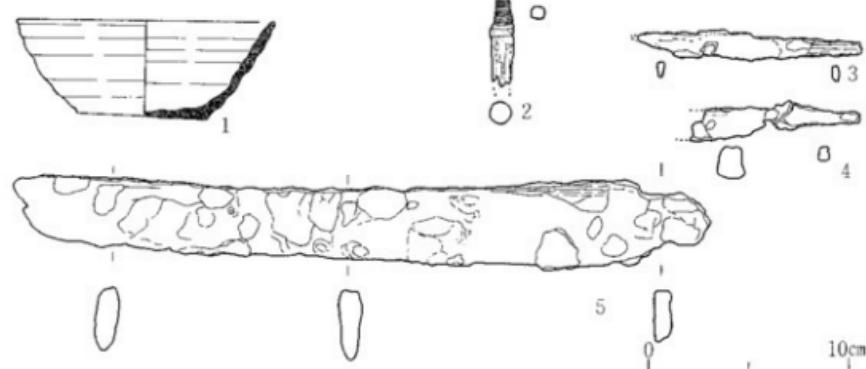
6号土塙墓出土遺物（第12図）

鉄製品 刀子(3)：切先の破片である。鉄鎌(1・2)：1は現長11.2cmを計る有茎のものである。身は扁平で鋭利で逆刺がつく。茎には木質部が残り、織維（糸）を巻いている。馬具(4)：銹化が著しく癒着して出土した。轡部の銜と鏡板と思われる。

漆器 漆皮箱(5)：一辺約14cm、器高約2.2cmの漆皮箱である。蓋はきれいに面取りしている。



第8図 4号土塙墓

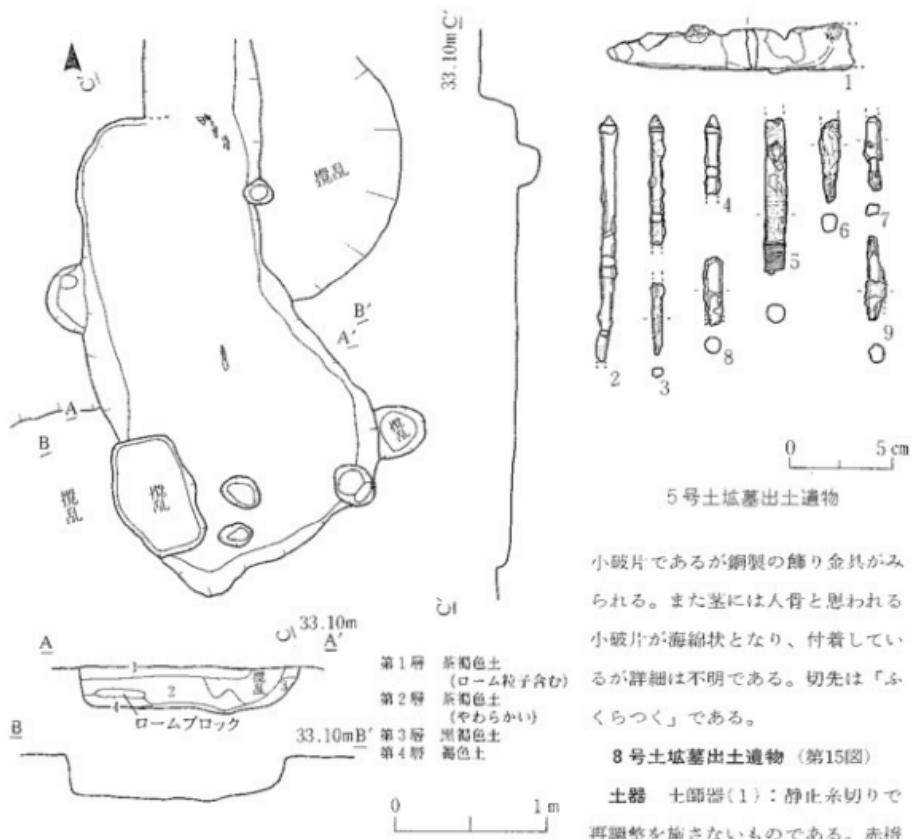


第9図 4号土塙墓出土遺物

7号土塙墓出土遺物（第13図）

土器 上飾器(1)：内面に黒色処理を施した台付坏である。回転系切り後にナデを施している。外体部下方には回転ヘラケズリが行われる。内体部は横・底部は放射状にミガキを施している。

鉄製品 鉄刀(第13図)：全長73.3cm、身幅3.4cm、刀身61cmを計る細身の刀である。全体に鞘の木部が残っている。区は不明であるが銅製の脛金をはめ、同様の脛がある。茎の目貫の部分には、



第10図 5号土塚墓

鉄製品 鉄刀(4):昭和15年度範囲確認調査で出土した。全長39cm、身幅3.7cm、刀身は24cmを計る。刃は不明であるが銅金がある。鞘の一部である木質が残っている。**刀子(2・3)**:2点出土したが1点は小破片である。2は現長約15.5cmを計る。切先は欠損し不明である。茎には木質が残る。

10号土塚墓出土遺物（第18図）

土器 赤褐色土器(1):回転糸切り無調整の壺である。

鉄製品 鉄鎌(2・3):身先端部と茎部分の破片である。

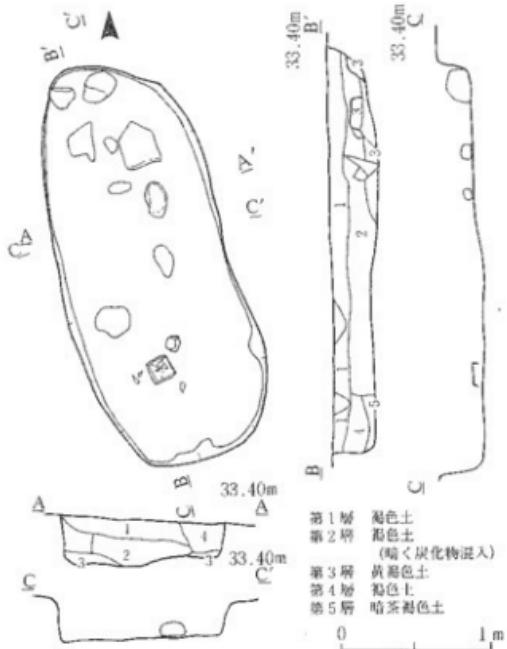
13号土塚墓出土遺物（第22図）

鉄製品 刀子(1):身・茎の一部が欠損する。木質部が部分的に残り、それに布と思われる繊維が付着している。**紡錘車(2)**:紡錘径6.4cm、紡茎長14.2cmを計る。紡茎の一端に欠損するが、一端にフックが付いている。全体に鏽化が著しい。

小破片であるが銅製の飾り金具がみられる。また茎には人骨と思われる小破片が海綿状となり、付着しているが詳細は不明である。切先は「ふくらつく」である。

8号土塚墓出土遺物（第15図）

土器 士師器(1):静止糸切りで再調整を施さないものである。赤橙色で焼成不良である。



第11図 6号土塙墓

14号土塙墓出土遺物（第23図）

土器 赤褐色土器（1・2）：2点とも底部切り離しは回転糸切り無調整である。

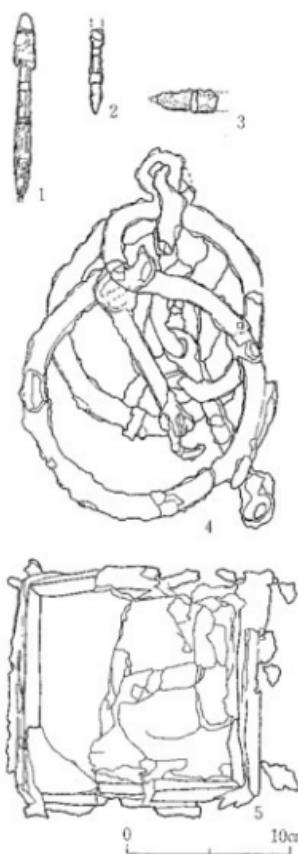
鉄製品 鉄刀（4）：全長38.6cm、身幅3.6cm、刀身29cmを計る。茎は一部欠損する。刃は両刃で、脛金がある。切先は「ふくらつく」である。本質が部分的に残っている。鏽化が著しい。刀子（3）：現長11.5cmで切先は欠損する。

15号土塙墓出土遺物（第23図）

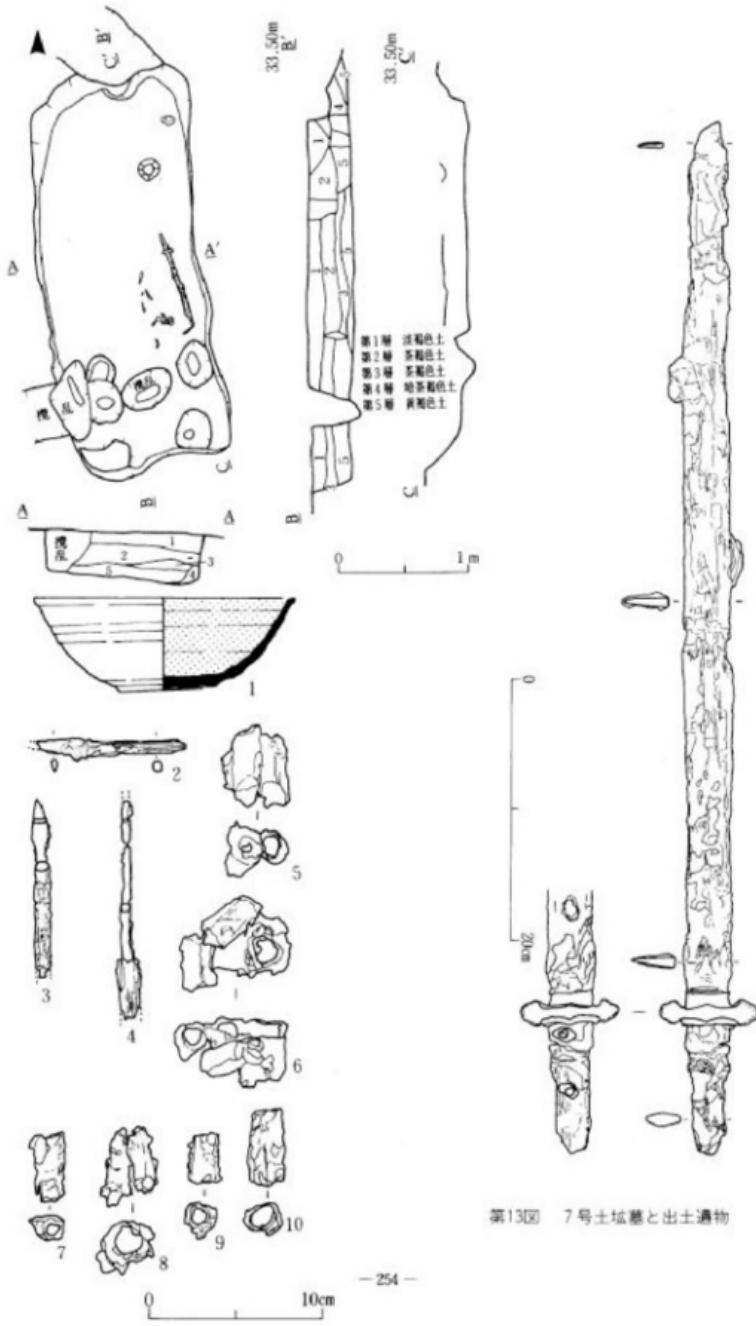
鉄製品 全長18.8cm、刀身11cmを計る。刀子1点が出土した。両刃で、切先は「ふくらつく」である。茎には木質が少し残る。

16号土塙墓出土遺物（第23・25図1）

土器 士師器（6）：回転糸切り無調整の内面に黒色処理を施した壺である。内体部は横方向、底部には放射状にガキを施している。



第12図 6号土塙墓出土遺物



第13図 7号土塙墓と出土遺物

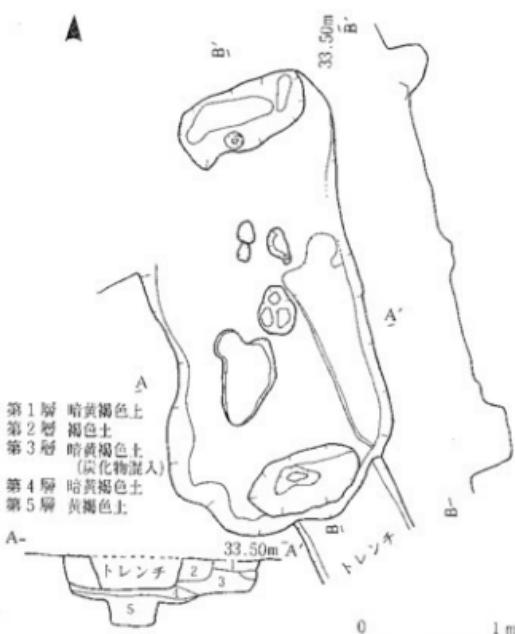
石製品 砥石(7)：長さ6.6cmの上部に孔のある携帯用のものである。表面に擦痕がみられる。凝灰岩である。

鉄製品 鉄刀(第25図1)：全長31.3cm、身幅3.3cm、刀身23.2cmを計る。

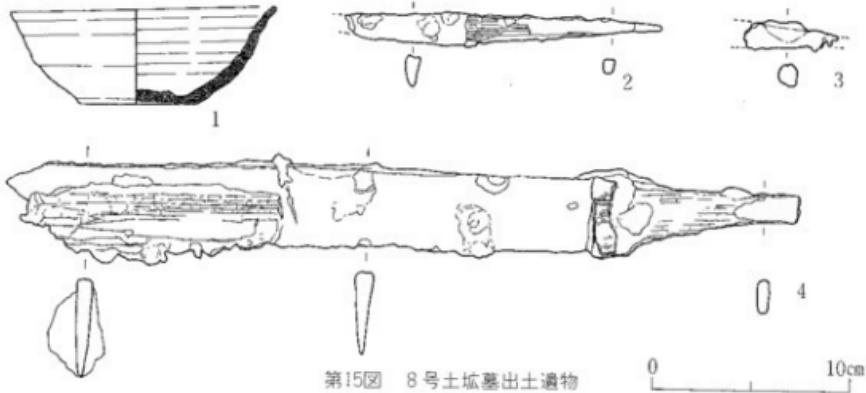
茎は一部欠損する。図は両区で切先は「ふくらつく」である。銹化が著しいが遺存状態は良い。鉄鎌(10)：長さ12.7cmを計り、茎には木質が残る。鉄鎌(8・9)：2点出土した。3は先端、4は両端が欠損する。いずれも一端をわずかに折り曲げる平鎌と思われる。

鎌先(12)：幅15cm、厚さ6cmのU字状を呈する。内側は、本体に装着するためV字状になる。銹化が著しい。

不明鉄製品(11・13)：11は現長8.3cm、厚さ5mmを計る。一端が直角に折れ曲がる。13は現長8cm、巾1.5cmである。



第14図 8号土塙墓

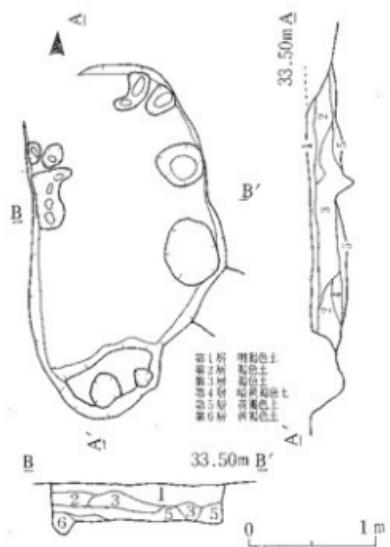


第15図 8号土塙墓出土遺物

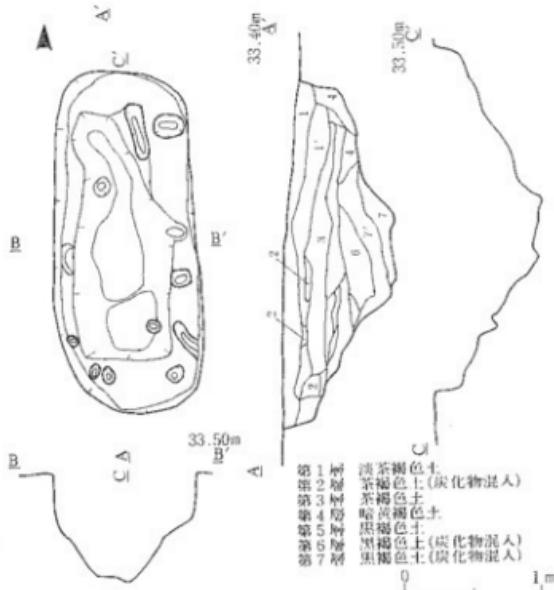
両端に小孔を穿ち、上部にはめ込んだ木柄を「紐」とてとめている。下部に刃をつけている。

銅製品 帯金具(14~18)：丸鞘1点、巡方4点が出土した。丸鞘は長さ3.5cm、厚さ0.15cmで内側に3本の足がつく。巡方は2種類あり、ひとつは、一边が3.3cm、厚さ0.11cmで内側の3隅に足がつくもの(12・13)と、一边が3cm×2.5cm、厚さ0.09cmで上部がわずかに湾曲する。内側には

窓を中心に3ヶ所に足のつくものである。銭貨(19)：皇朝12銭の1種である「隆平永宝」が1点出土した。外径は約2.4cm、中央の方孔は一辺約0.67cmである。字体は楷書体である。初鑄年は796年(延暦15年)11月である。不明銅製品(20・21)：14は上部に穿孔のある厚さ0.3cmの金具である。21は側方に開口部があり、断面が「かまぼこ型」をなす。



第16図 9号土塙墓



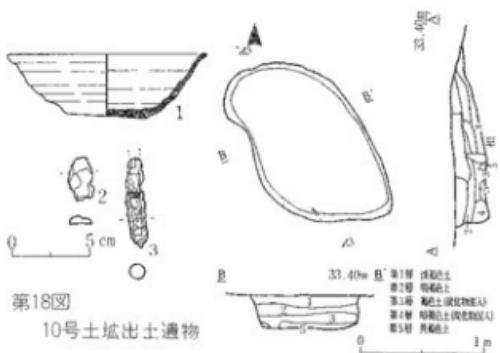
第17図 10号土塙墓

17号土塙墓出土遺物 (第25図)

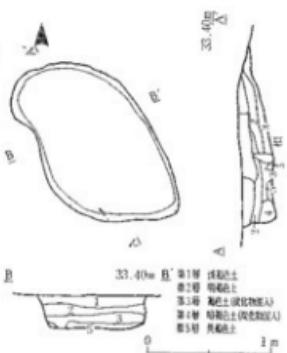
鉄製品 鉄鎌(2～7)：2・3は身先端部扁平で三角形を呈する。他は茎部分であり、木質が残る。2・4は織維(糸?)を巻きつけている。

19号土塙基出土遺物 (第25図)

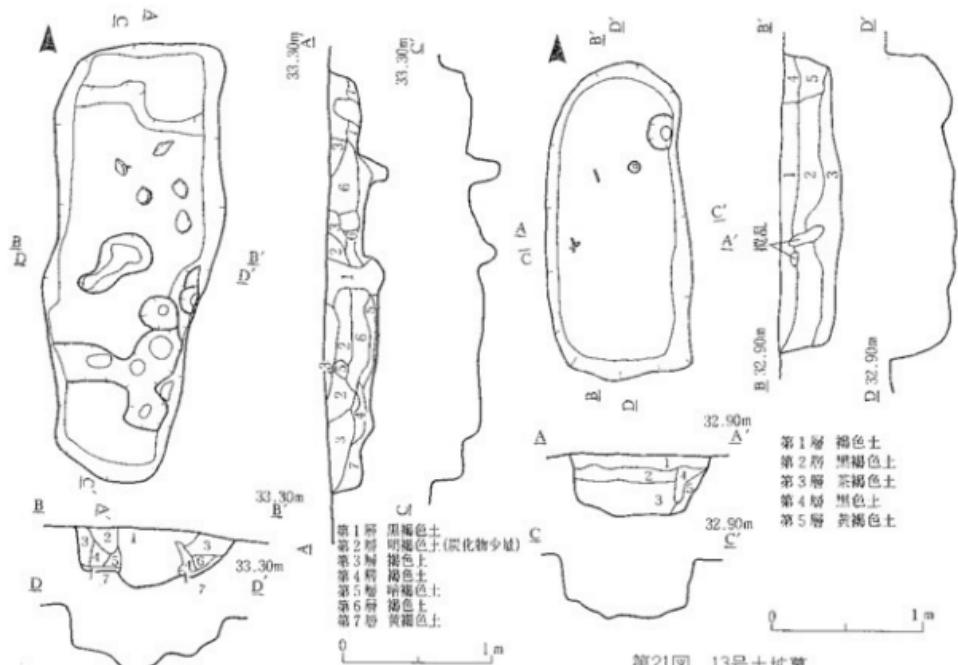
鉄製品 鉄刀(8)：現長35.6cm、刀身23.5cmを計る。身幅は4cmと広く、棟巾も厚い。身・茎に木質が残り、鞘の一部と思われる。錆化が著しいが遺存状態は



第18図 10号土塙出土遺物



第19図 11号土塙墓



第20図 12号土塚墓

良好である。刀子(9)：現長8.6cmを計る。刀身は4cmで細い。茎には木質が残る。

20号土塚墓出土遺物（第25図）

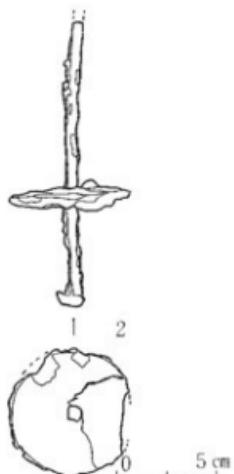
土器 赤褐色土器(10~12)：10~12すべて底部切り離しは回転糸切り無調整の坏である。

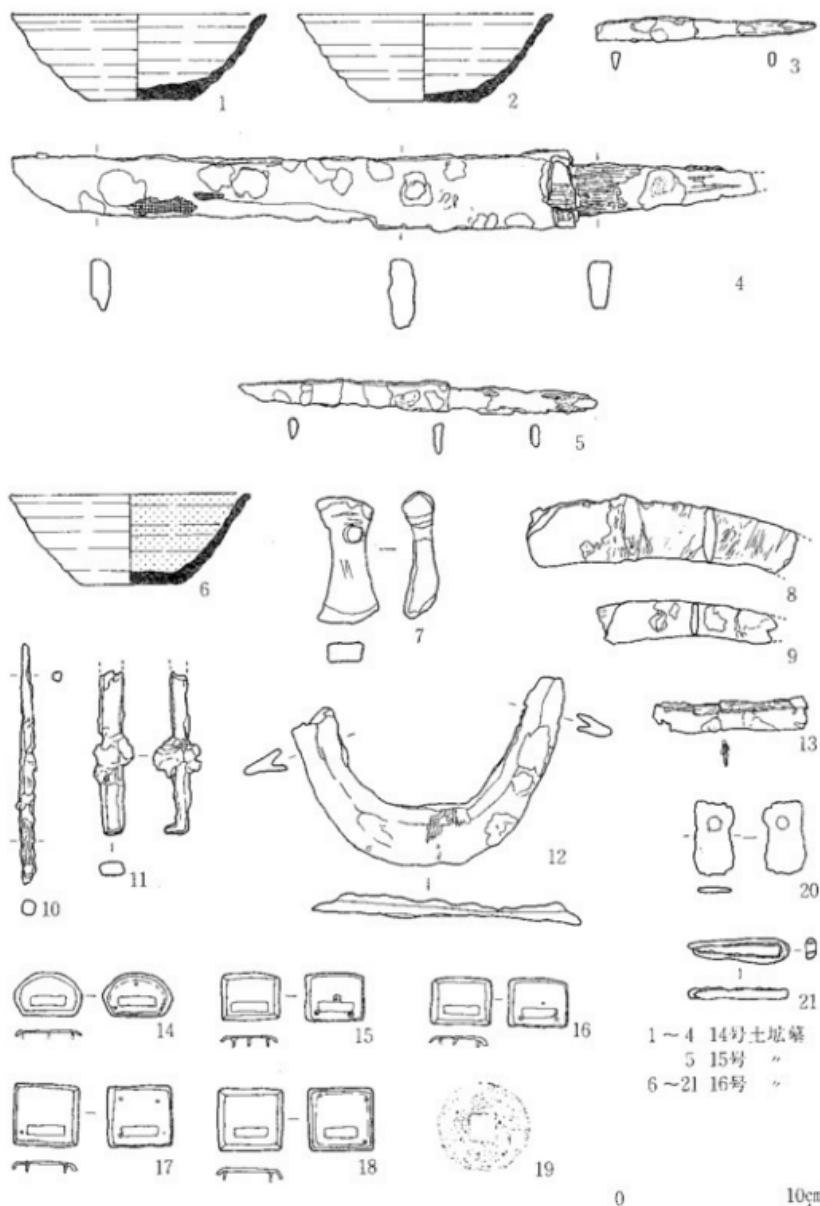
鉄製品 刀子(13)：9.3cmを計る。身は欠損している。茎には木質部が残る。

21号土塚墓出土遺物（第25図）

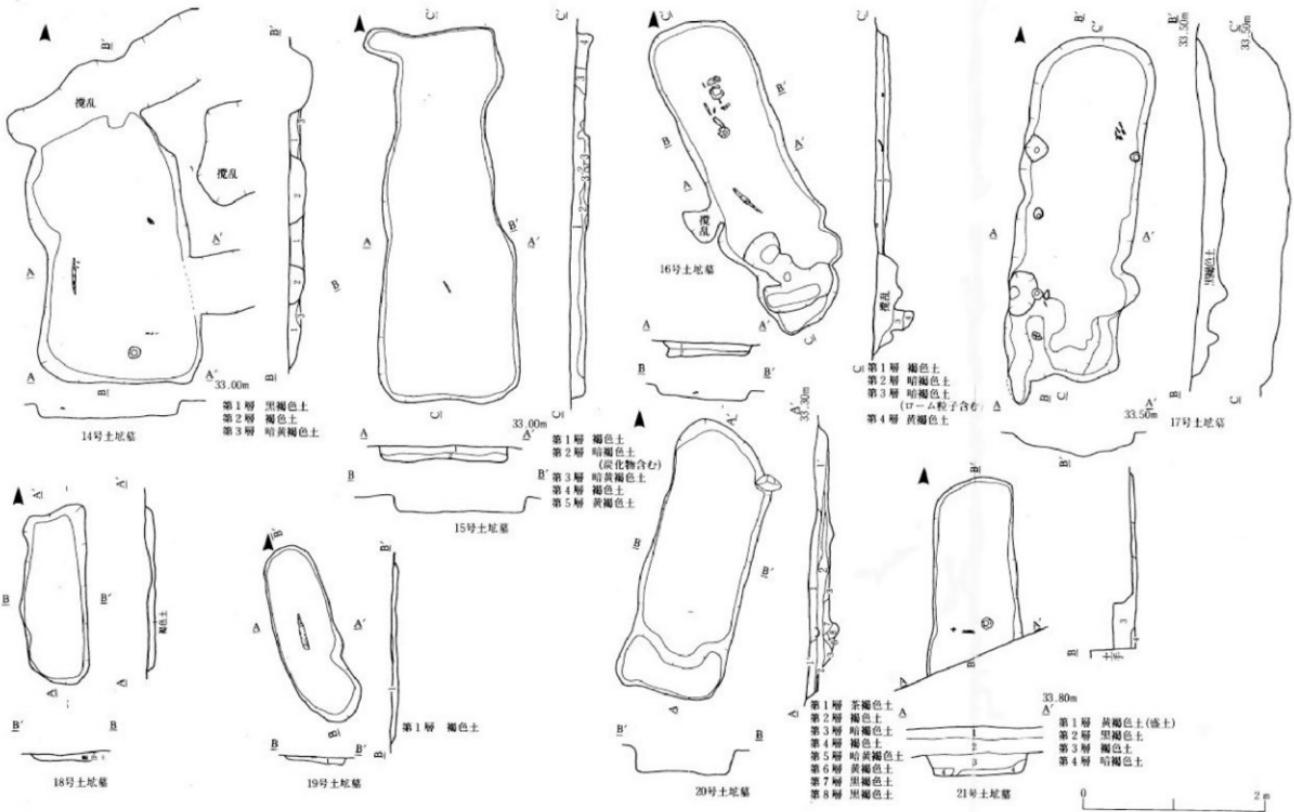
土器 赤褐色土器(14・15)：14・15とも回転糸切り無調整の坏である。

鉄製品 刀子(16・17)：16は全長11.5cm、刀身5.9cm、17は全長14.2cm、刀身7.4cmを計る。いずれも茎には木質が残る。纺錘車(18)：紡輪径5.5cm、紡茎長20.4cmを計る。紡車の両端は欠損する。銹化が著しい。

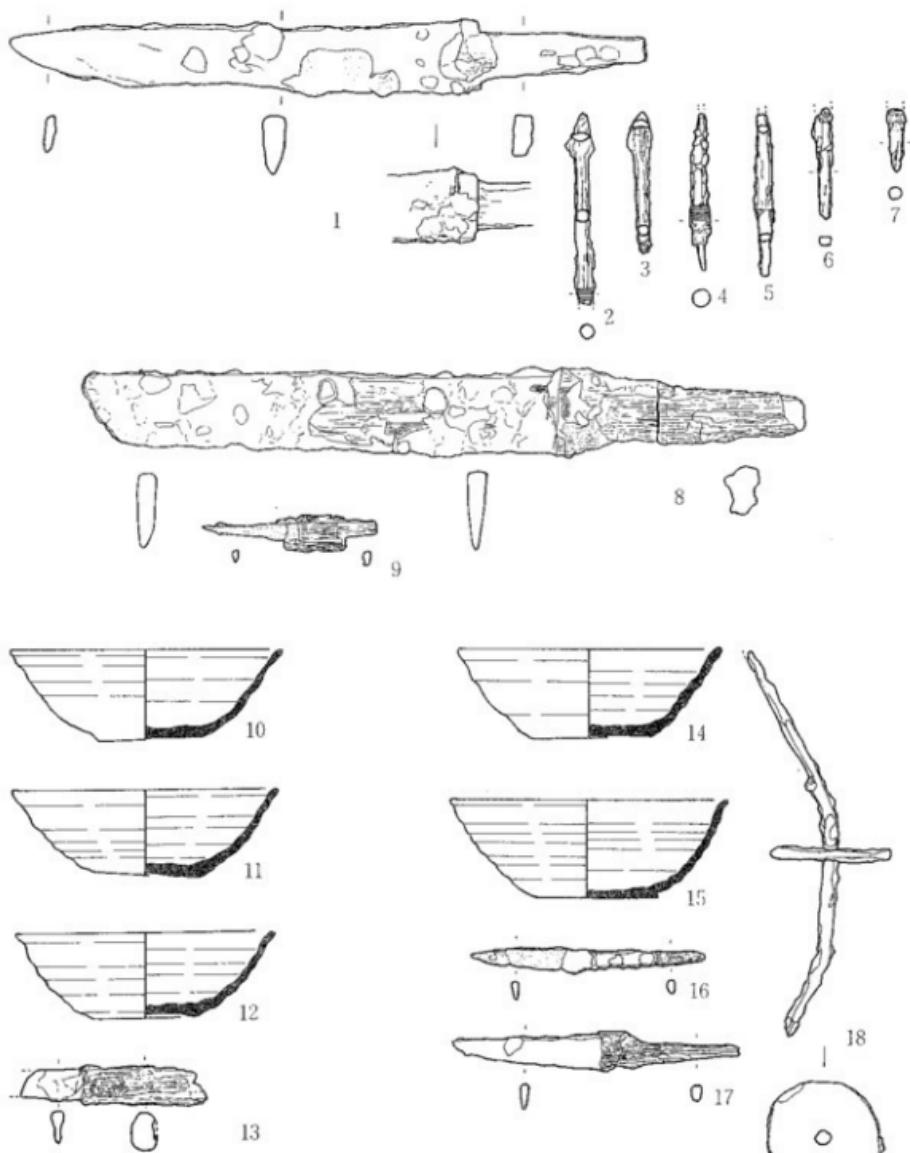




第23図 土坡墓出土遺物



第24図 土 坑 墓



1 16号土塚墓
2~7 17号 “
8 19号 “
10~13 20号土塚墓
14~18 21号 “

第25図 土塚墓出土遺物



豎穴状遺構（第26図）

調査区の東、15号土塙墓の西で検出した。

プランは長軸3.4m、短軸2.7mで若干北に開く方形を呈する。壁高約10cmで床は平坦である。西側に溝状の落ち込みが確認されているが、本遺構との関係は不明である。

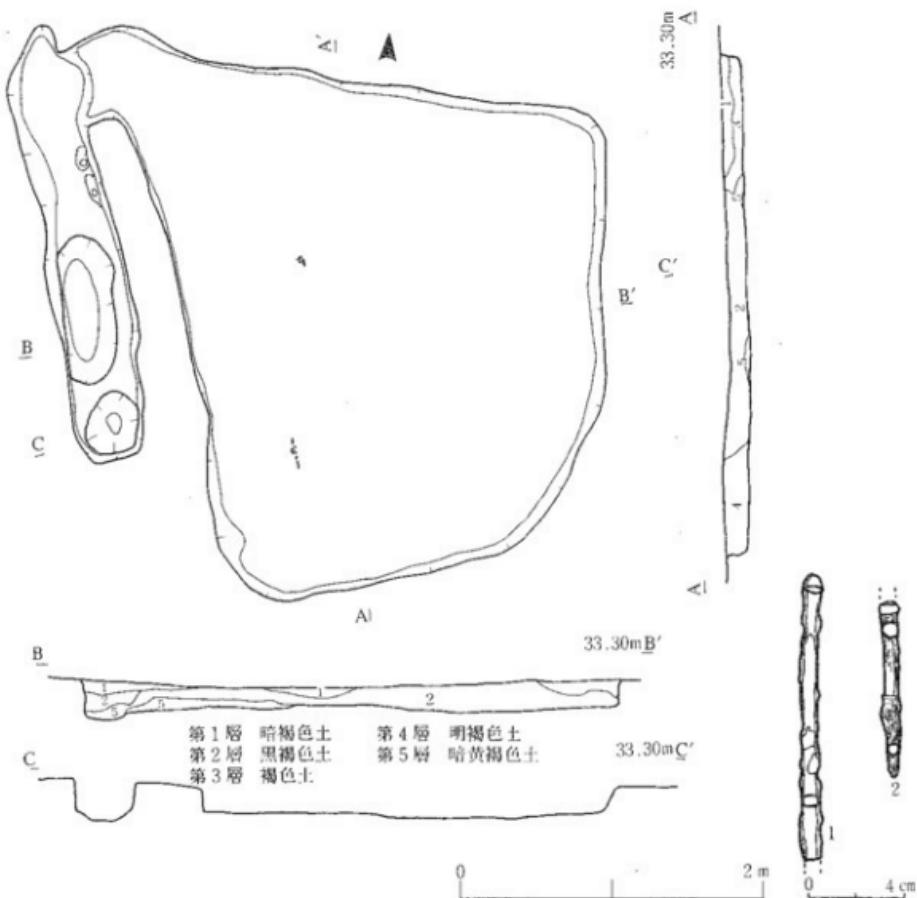
出土遺物（第26図）

鉄製品 鉄鏃（1・2）：1は身の先端を叩き扁平にしたものである。2は茎の部分である。

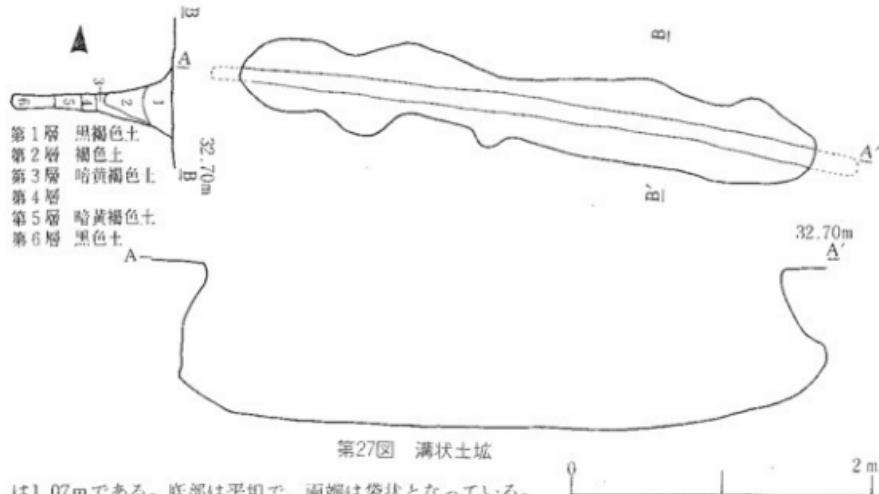
溝状土塙（第27図）

調査区の東、豎穴状遺構、15号土塙墓の下部ヨーム面で検出した。

プランは、細長い溝状を呈し、長軸は東西で、上部3.84×0.45m、底部は4.33×0.15mで、深さ



第26図 豊穴状遺構と出土遺物



第27図 溝状土塙

は1.07mである。底部は平坦で、両端は袋状となっている。

溝状落ち込み内出土遺物（第28図）

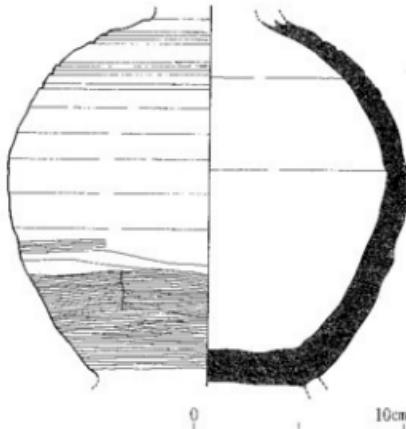
15号上埴器下部から検出した溝状の土塙内から出土した須恵器壺である。頸部から上は欠損している。肩部に2条、やや下方に3条の細い沈線を施している。体部下方には横方向にカキ目を施している。焼成は良好である。

造構外出土遺物（第29図）

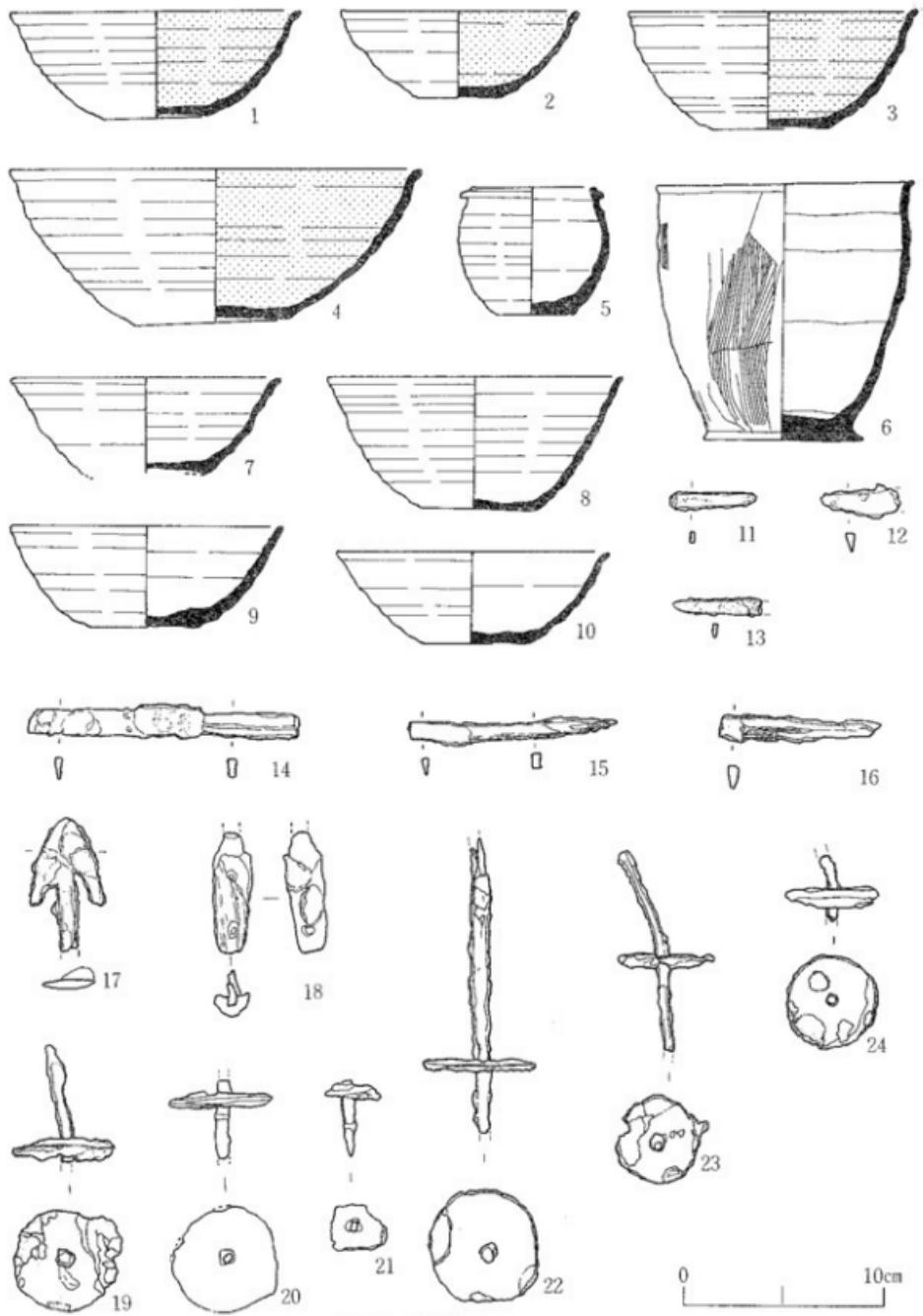
造構外の第2層褐色土上面から土師器、赤褐色土器、鉄製品が多く出土した。

土器 土師器(1~6)：1~4は黒色処理を施した壺である。いずれも回転糸切り無調整である。内体部は横、底部は放射状にミガキを施している。2は外面にも黒色処理が施されている。4は口径20.7cmを計る大形のものである。5・6は甕である。5は口径6cmの小形のもので回転糸切りである。6は底径8cm、口径12.9cmを計る。ゆるく内湾しながら口縁に至り、口縁はわずかに外反する。外面には綫方向に細かい刷毛目痕がある。胎土中に砂、小礫が多く含まれ、器表面はザラザラしている。巻き上げ（輪積み）痕跡が明瞭にみられる。赤褐色土器(7~10)：8・9は回転糸切り無調整である。7・10は磨滅が激しく切り離しは不明である。

鉄製品 刀子(11~16)：身・茎の破損品6点が出土した。15・16の茎には本質が残る。鉄鎌(17)：先端部の破損品である。鎌としては大形のものである。紡錘車(19~24)：紡錘径4~5.3cmを計るもののが6点出土している。紡錘はいずれも欠損している。不明鉄製品(18)：現長6.2cm、幅1.7cmを計る。二本の鉛（釘）が打たれ、その先に木質が付着している。



第28図 溝状落ち込み出土遺物



第29図 遺構外出土遺物

まとめ

土塚墓について

湯ノ沢下遺跡から21基の土塚墓を検出した。以下簡単にまとめてみたい。

規模：土塚墓の規模は、最大のもので長径4.1m、巾1.48m、最小のものは長径1.46m、巾0.94mである。平均値は長径2.8m、巾1.68mで深さは確認面から26.6cmである。

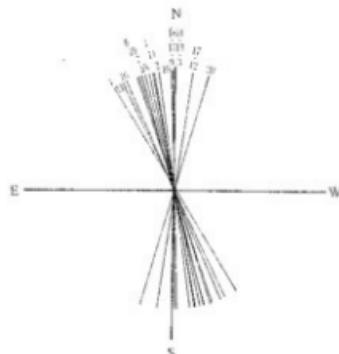
長軸方位：長軸方位についてみると、すべてがN32°WからN16°Eの範囲に入り概略北方向である。1・2・5～9号土塚墓はほぼ同方向にあり、特に2・6～9号土塚墓はまとまっている。また、3・10・12・14・15・18・21号土塚墓、4・11・16・19号土塚墓、17・20号土塚墓がほぼ同方向にある。方位からみると4群に別けられるようである。

埋葬形態：木棺が考えられる。木棺は腐敗して土壤化しているが、その痕跡が3・4・10・20号土塚墓に明瞭に認められる。副葬品もまたその痕跡内に納められているなどの点からも木棺の可能性が大きい。しかし木棺の蓋をとめる鉄釘の出土はなかった。

埋葬頭位：人骨の出土もなく明確に判明できるものはない。ただ副葬品、特に鉄刀、土器の位置からある程度推測できる。鉄刀は16号土塚墓を除き切先をすべて南に向けて置かれている。土器については、北に置くものが2・4・7・8・10・16号土塚墓、南に置かれるのが3・14・20・21号土塚墓であり、北に置かれるものが多い。被葬者の頭部方向には鉄刀の切先を向けないものと仮定するならば頭位は北位置であろうと考えられる。

性別：土塚墓に埋葬された被葬者の性別を判明することは、人骨の出土もなくまったく不可能に近い。しかし、あえて土塚墓の規模、副葬品の相違からある程度考えてみたい。推測できる副葬品には女性の持ち物と考えられる筋錠車がある。筋錠車の検出された土塚墓は1・13・21号土塚墓で、これらには鉄刀、鐵鎌などの武器類の出土ではなく、他に比べると土塚墓の規模もきわめて小さい。これらの点から1・13・21号土塚墓には女性が埋葬された可能性も考えられる。

時期：土塚墓は最も接近するもので約30cmの間隔しかなく、隣接してはいるが重複はまったくみられない。あるいはマウンド、結構の存在も考えられるが、いずれにしろ長期間にわたるものとは考えがたい。副葬品として出土した土器は復原器皿、土師器皿、赤褐色土器がある。ほとんどは赤褐色土器である。赤褐色土器は、すべて回転糸切り後の再調整はまったくみられないものである。秋田城跡、弘田櫛跡からは底部および周縁に回転ヘリケゼリのある赤褐色土器が出土しており、弘田櫛跡では嘉祥2年(849年)の紀年名のある木簡と伴出していることから、これらヘリケゼリのあ



插図 土塚墓長軸方向

る土器群は9世紀中半頃に位置づけられる。それよりも技法的に新しい本遺跡出土の土器には10世紀以降の年代が考えられる。

以上簡単にまとめてみた。立派な副葬品をもつ被葬者の解明、この地域を墓域とした人々の集落の発見等々まだまだ問題点が多い。土塙墓はさらに北西方向に広がる相様を呈していることから今後詳細に調査を実施して、10世紀以降の歴史的背景もふまえ今後の課題とし、新たに報告する機会を持ちたい。

参考文献

小林行雄：「古代の技術」昭和37年 塩書房

木永雅雄：「日本武器概説」 1971

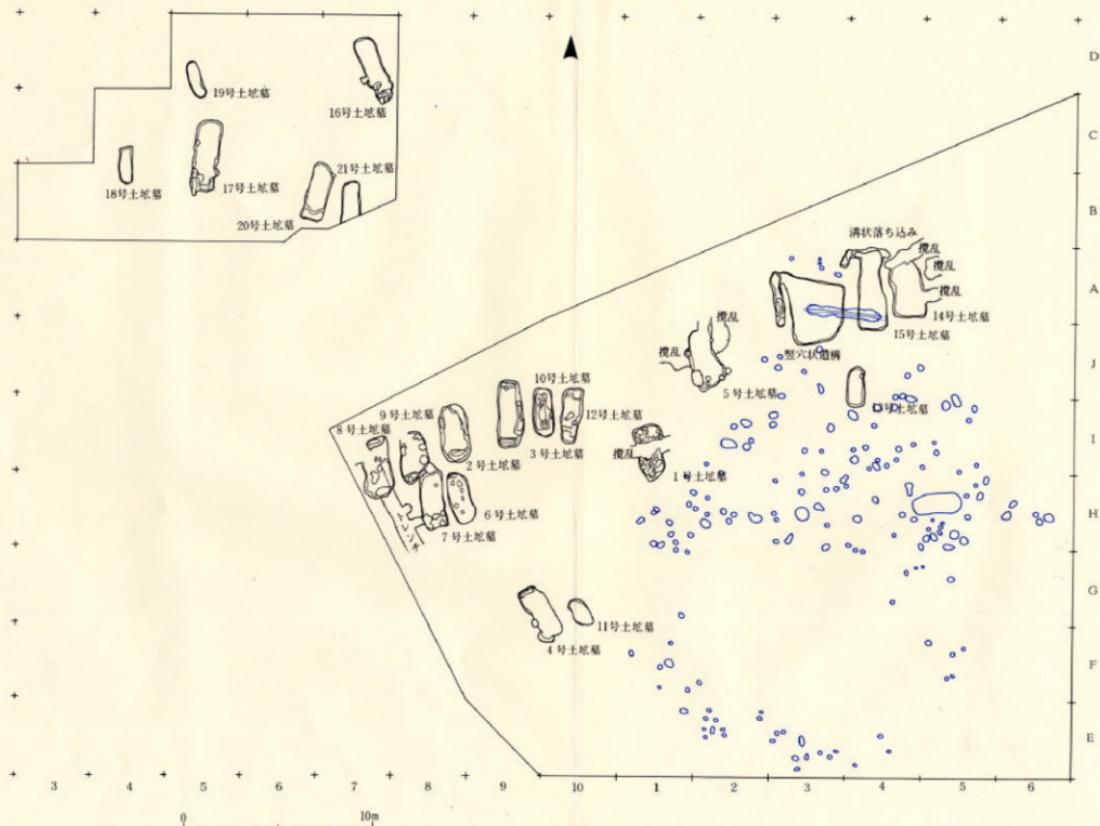
秋田県教育委員会：「弘田櫛跡」

昭和49～57年

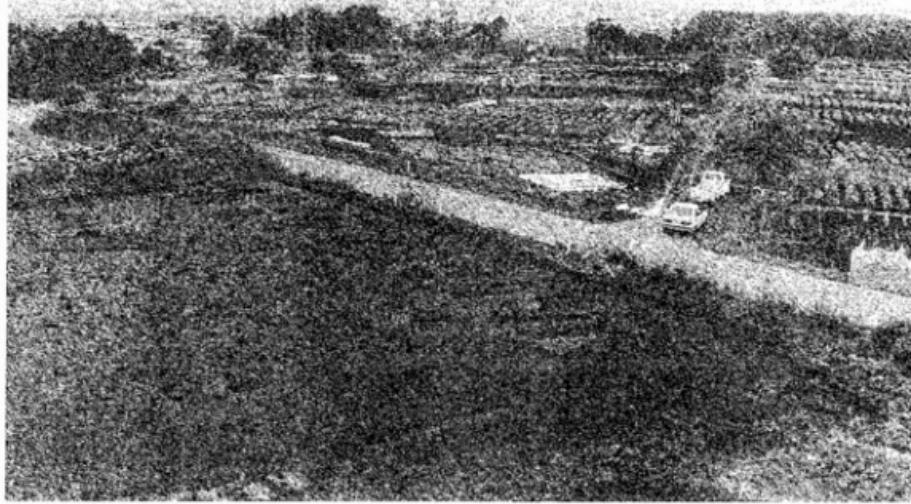
秋田市教育委員会：「秋田城跡」

昭和50年

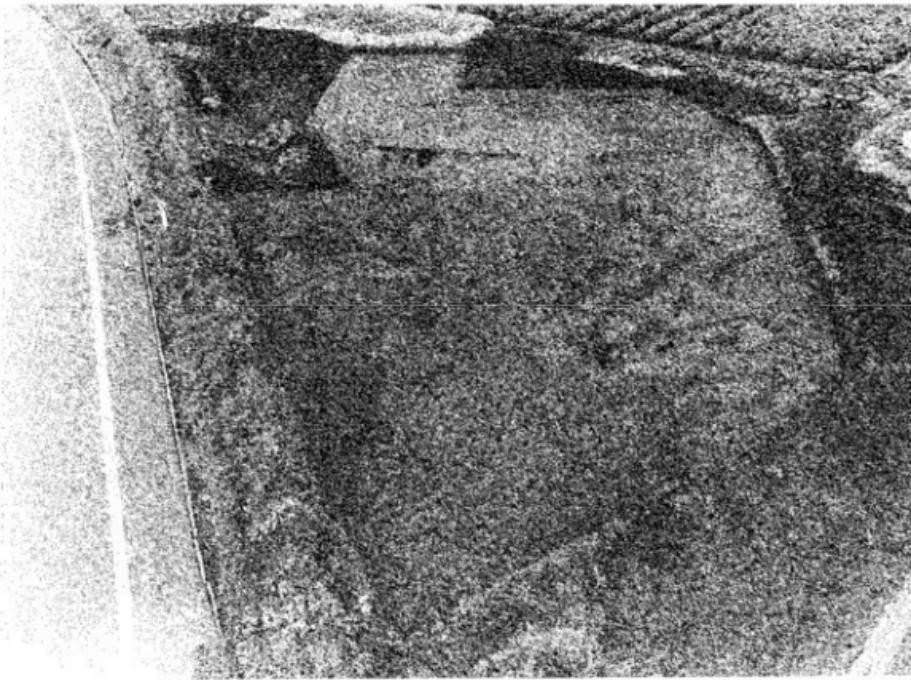
秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」 1983



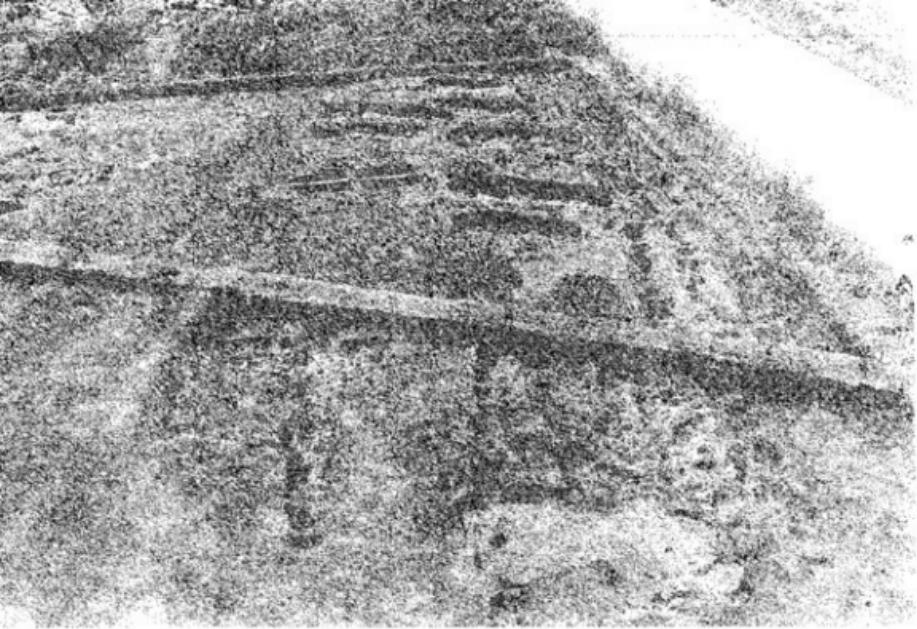
第30図 濱ノ沢F遺跡、構造配置図



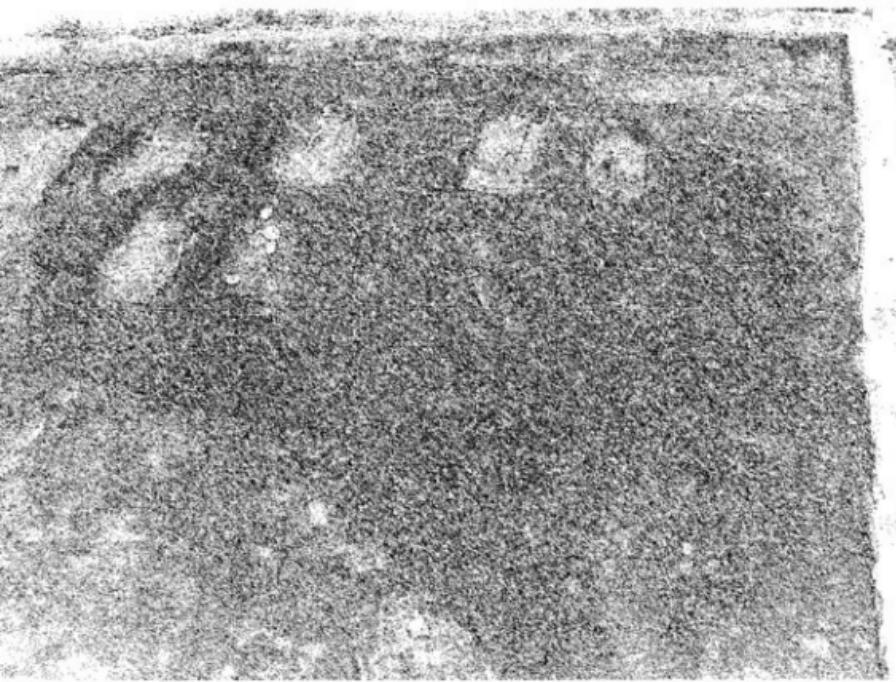
遺跡全景（南東→）



遺跡全景（東→）
図版1



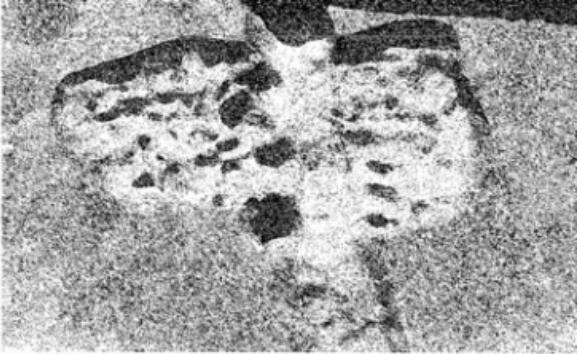
遺跡近景（東→）



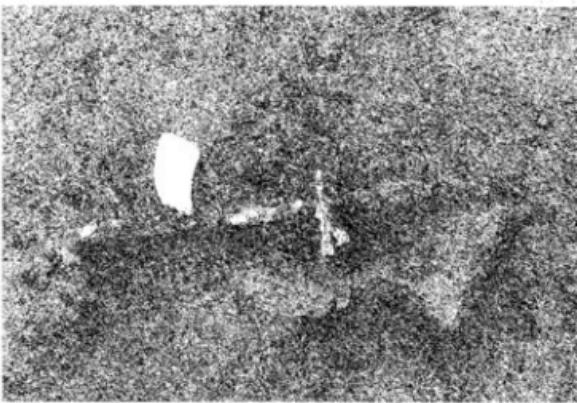
遺跡近景（南→）

図版 2

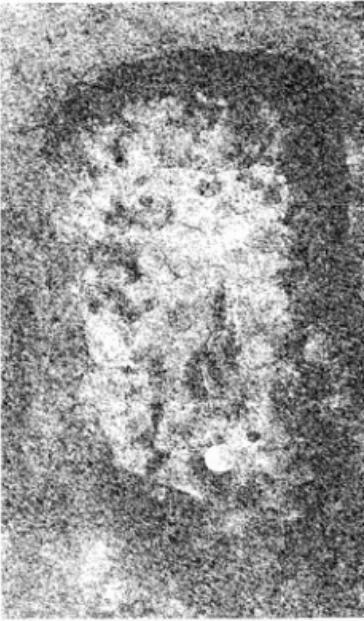
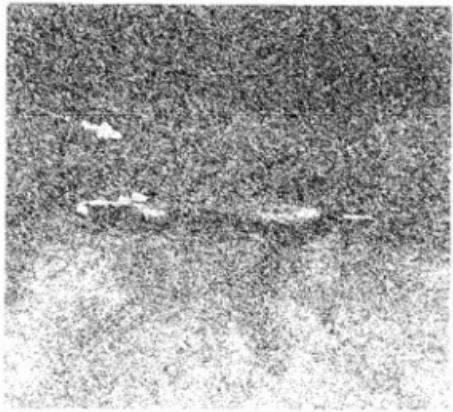
1号土塚墓
(東→)



1号土塚墓遺物
出土狀態
(東→)



2号土塚墓 (北→)





左：3号土坟墓（南→）

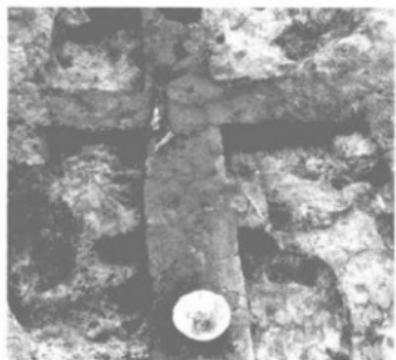
上：3号土坟墓土层（南→）



3号土坟墓
遗物出土状態
(西→)



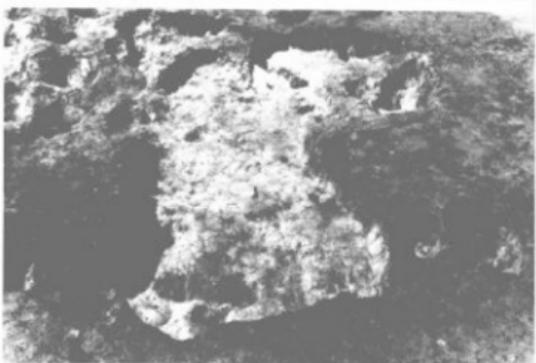
3号土坟墓
遗物出土状態
(西→)



右：4号土塙墓（北→）
左：4号土塙墓遗物出土状态（北→）



5号土塙基
(南→)



右：6号土塙墓（南→）
左：漆皮箱出土状态（东→）





左：7号土塚墓（南→）

右：◆ 土層



7号土塚墓（西→）

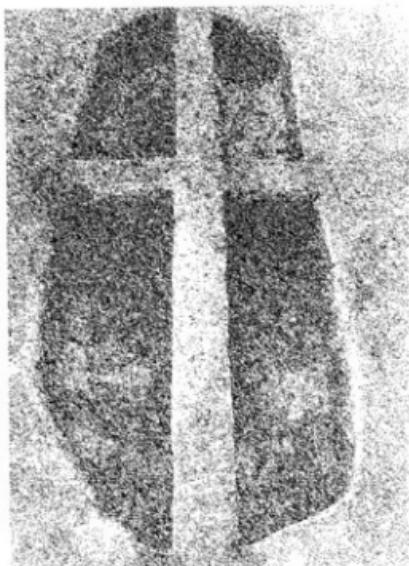
遺物出土状態



8号土塚墓（北→）



右：9号土墳墓（南→）
左：9号土墳墓土層（南→）

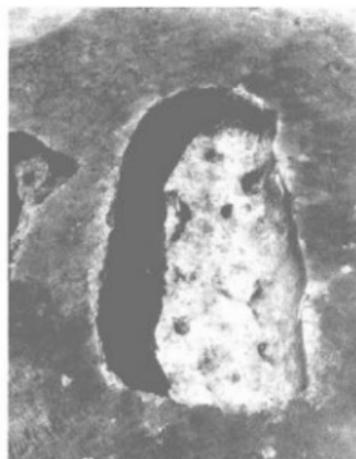


上右：10号土墳墓
(南→)



中・左・下：10号土墳墓
木棺痕跡
(南→)





上左：12号土塚（南→）

上右：13号土塚（南→）



13号土塚
紡錘車出土状態
(南→)



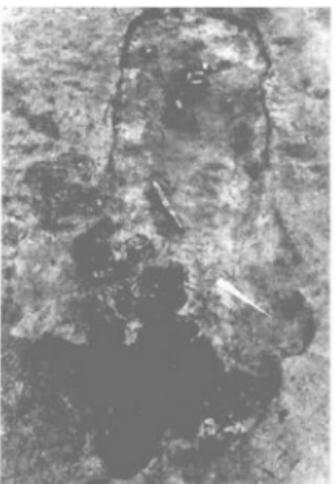
左：14号土塚
(南→)



右：15号土塚
(南→)

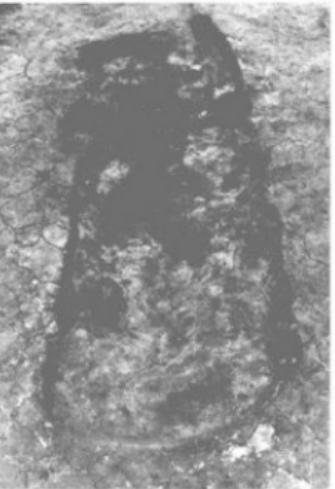


上右：16号土塚墓
(南→)
上左：鐵刀出土状態



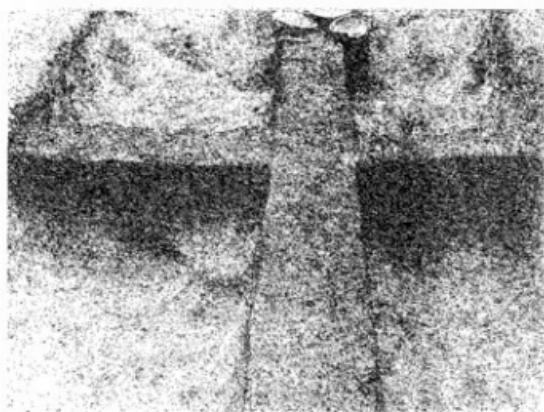
中：16号土塚墓
遺物出土状態
(東→)

下右：17号土塚墓
(北→)
下左：19号土塚墓
(南→)





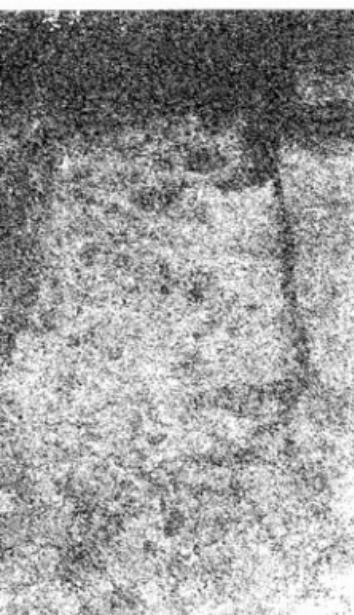
20号土塚墓 (北→)



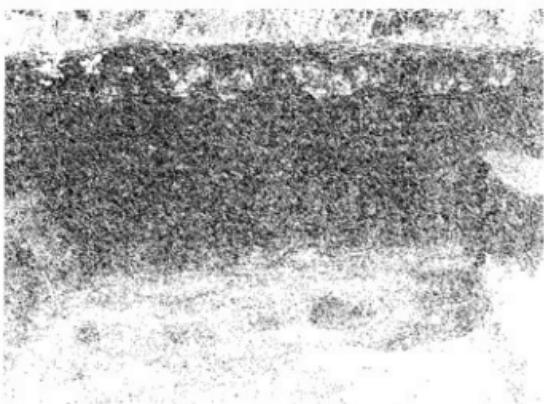
土 层 (北→)



20号土塚墓出土物状態
(東→)

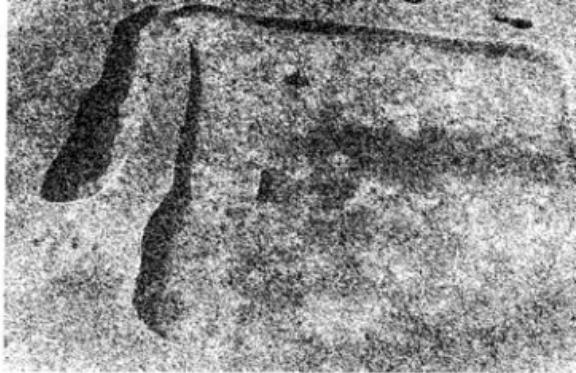


21号土塚墓 (南→)

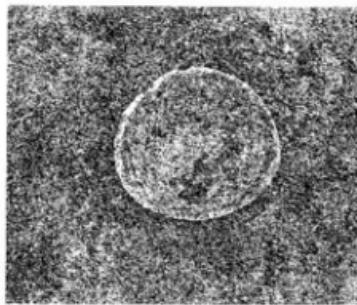
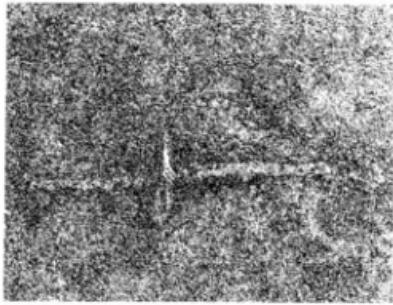


土 层 (南→)

堅穴状遺構
(南→)



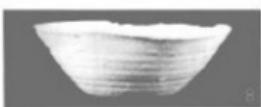
中：溝状土塗



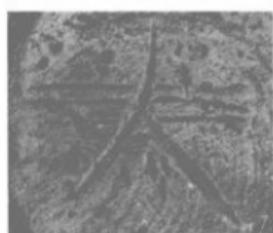
遺構外遺物出土状態



1・2：1号土塚墓
3～6：2号土塚墓



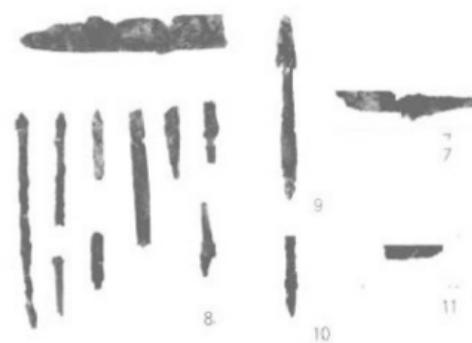
7～9：3号土塚墓





1・2：3号土塙墓
3～7：4号土塙墓
8：5号土塙墓
9～13：6号土塙

図版13



12



13



1~8: 7号土塚墓
9~11: 8号土塚墓
12~14: 10号土塚墓
15~16: 13号土塚墓
17~20: 14号土塚墓

1 : 15号土塚墓
2~11 : 16号土塚墓
12 : 17号土塚墓



19



14

13

11

12

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

13~14 : 19号土塚墓





1



2



9



3



4



5



6



10



11



7



8

1～3：21号土塙墓
4～5：竪穴状遺構
6～7：溝状落ち込み
7～30：遺構外出土



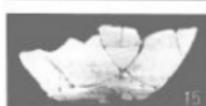
12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28

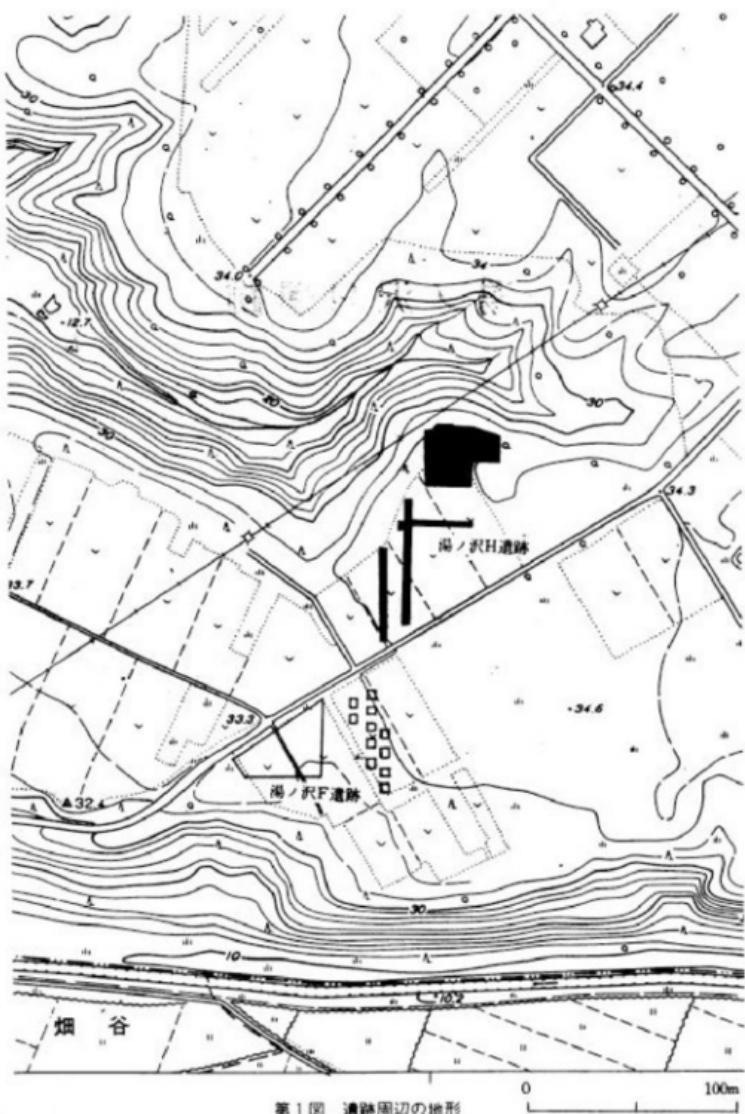


29



30

湯ノ沢 H 遺跡



第1図 遺跡周辺の地形

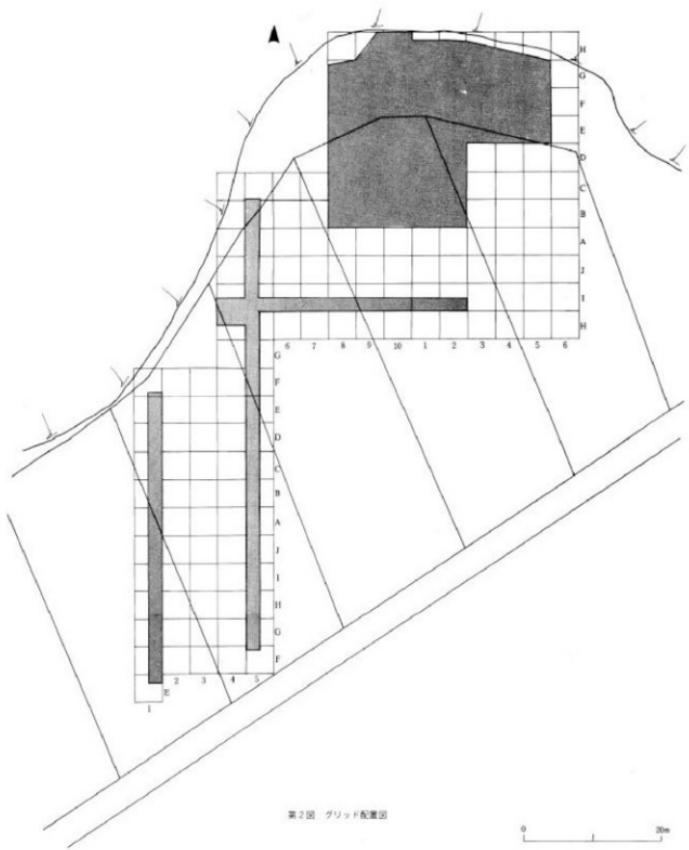


図2 図 グリッド配置図

0 20m

遺跡の概要

湯ノ沢E遺跡から東へ300mの小さく北に突き出る舌状台地にある。遺跡は、台地の中央部に當まれ、検出された遺構は縄文時代中期の住居跡、土塁、晚期の炉跡、土塗等である。遺物は、縄文時代前中期葉～晚期の土器、石器、弥生時代の土器片等が出土している。

遺構と遺物

1号住居跡（第3図）

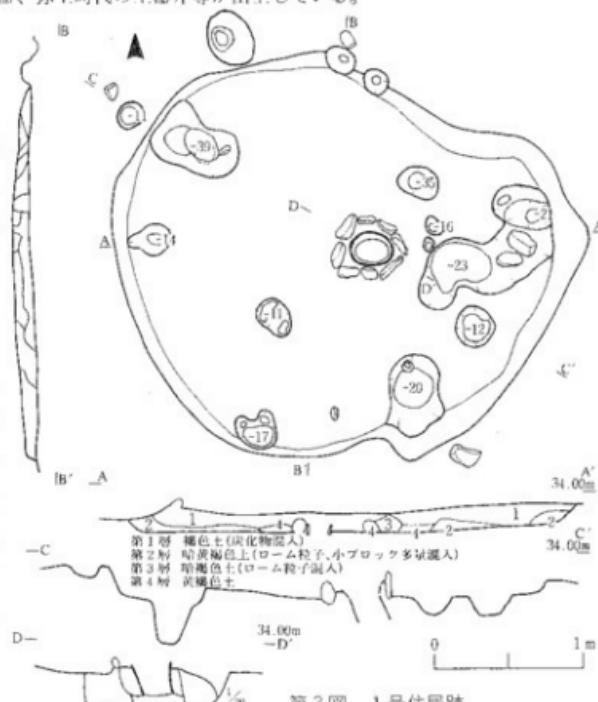
調査区の東側に位置する。

プランは、径3m程の円形を呈する。壁高約15cmで、わずかに傾斜しながら立ち上がる。覆土は褐色土が主体で、暗い黄褐色土、ブロック状に軟らかい黄褐色土が堆積している。ピットは、壁下に肩るよう検出されたが、比較的浅く主柱穴と思われるは不明である。かは、中央や東側に15～20cmの扁平な碟で埋設土器を埋む「土器埋設石皿い」である。床面は、平坦であるが炉周辺を除くと軟弱である。

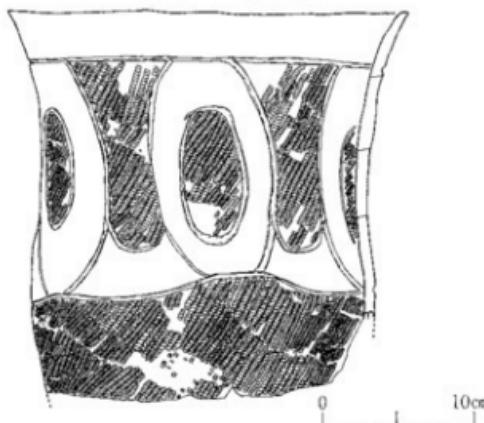
出土遺物

土器（第4図）

炉埋設土器である。底部は欠損する。口径26.4cmで胸下部分がゆるく膨む深鉢形土器である。頸部に一条の沈線、胴部にはゆるい波状の沈線がめぐり、その間に沈線により5単位に横円文が二重に施される。またその間にU字状の沈線を配し連絡している。沈線間は磨消される。地文の縄文は、R.Lの縦位回転である。施成は良好で、口縁部から頸部にかけて二次加熱を受けている。



第3図 1号住居跡



第4図 1号住居跡、炉埋設土器

2号A・B住居跡（第7図）

調査区のはば中央部に位置する。炉が住居跡の中央部（A炉）と北側（B炉）の二カ所に検出されたことから2時期が考えられる。

現存するプランは、長軸5m、短軸4mの南北に長い椭円形を呈する。壁高は良好なところで約20cmを計る。このプランがどちらの炉に伴うものか不明である。炉は、A・Bとも石囲いの炉で、B炉が若干小さくなる。A炉が確認レベルも高く、また貼り床も認められることから、新しい時期と思われる。ピットは壁下に二重に確認され柱穴と考えられる。北西部に径70cm、深さ1mの袋状を呈する土塙があり、住居跡に伴うものと考えられる。北西部に径70cm、深さ1mの袋状を呈する土塙があり、住居跡に伴うものと考えられる。古いBの床は軟弱である。

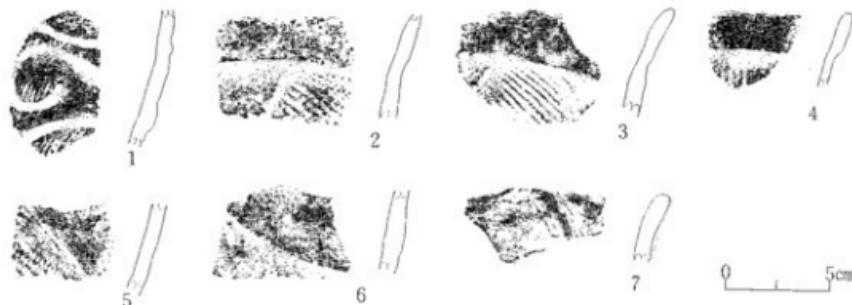
出土遺物

土器（第5図）

1は袋状上埴覆土出土である。沈線で文様を描く。2～7は住居跡覆土から出土した。2～4は口縁部がやや外傾し無文帯である。胴部は沈線と磨消し手法によって縦文帯と無文帯を画する。7は無文部に縦に隆線が付され、その両側に刺突を施すものである。

石器（第16図1・2）

磨製石斧が2点出土した。2は刃部の破片である。二つともきれいに研磨されている。



第5図 2号住居跡出土遺物

1号炉跡（第7図）

調査区中央部、2号住居跡南壁に隣接して検出された。住居跡の炉と思われるが住居跡のプランは不明で、炉の遺存だけである。炉は、上器埋設石囲いの炉である。2号A・B住居跡の確認面と同レベルにあることや、埋設土器から晩期の時期と思われる。

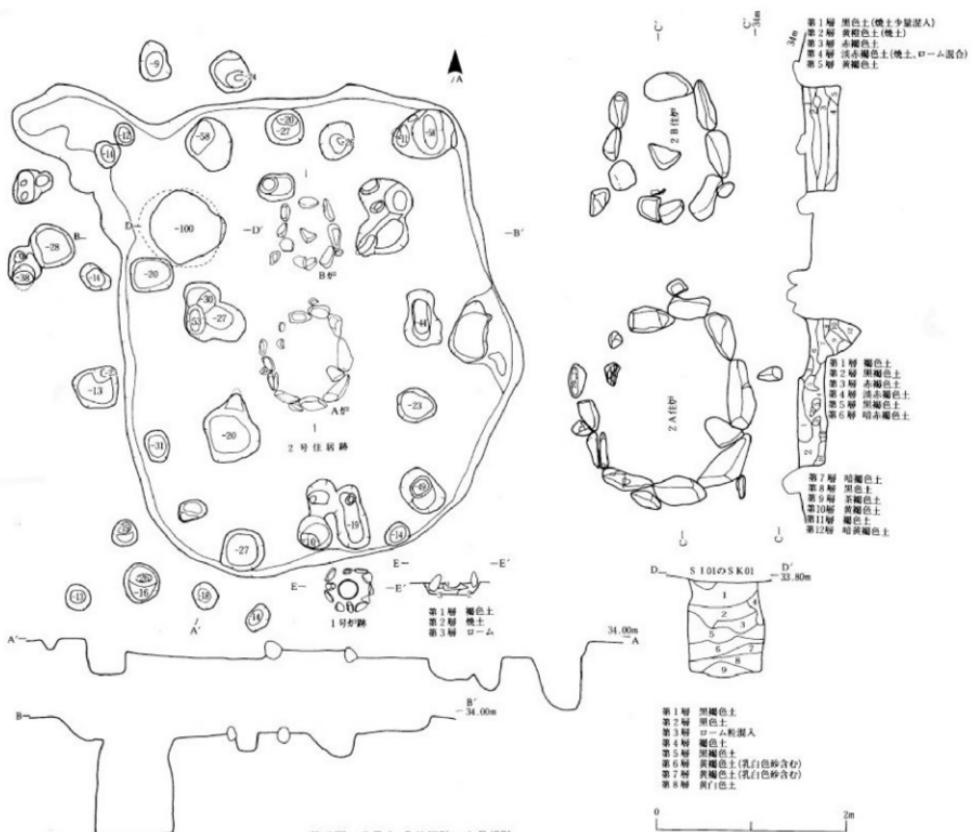
出土遺物

土器（第6図）

が埋設土器である。上部は欠損している。底径7cmで、内湾しながら立ち上がる鉢形土器である。地文はL Rの横



第6図 1号炉跡、炉埋設土器



第7回 2号 A-B 住居跡、1号炉跡

位回転の斜繩文である。

1号竪穴状遺構（第8図）

調査区の東側、1号住居跡の南に位置する。

プランは、径約2.5～3mの不整円形を呈する。壁高は約24cmで、ほぼ垂直に立ち上がり良好である。覆土は褐色土、暗黄褐色土、黄褐色土が堆積し、やわらかくブロック状をなすところもみられる。ピットは壁下に検出されている。床は非常に軟弱である。

2号竪穴状遺構（第9図）

1号住居跡の北東に位置する。

プランは、長軸3.35m、短軸2.6mの梢円形を呈する。壁高約10cmで、若干傾斜しながら立ち上がる。覆土は、炭化物の混入した褐色土、黄褐色土、黒褐色土などが堆積する。中央部に不整形のピットがあるが覆土から擾乱であることが判明した。

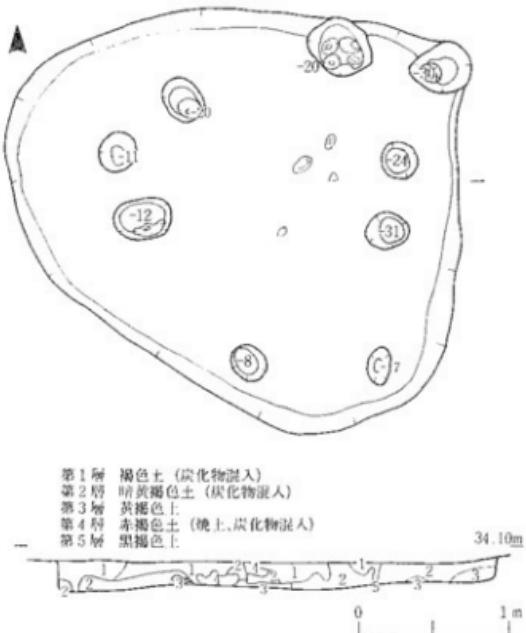
3号竪穴状遺構（第9図）

調査区の東側、1号竪穴状遺構の南側に位置する。

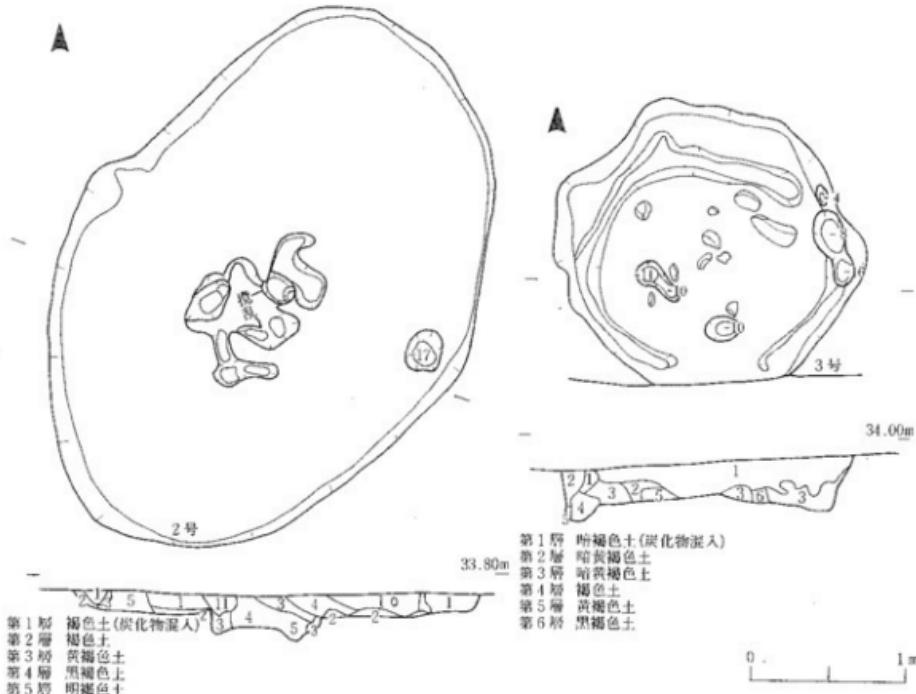
プランは、径約2mの円形を呈する。壁高は約40cmである。壁直下には、深さ約10cmの周溝が認められた。床面は平坦で良好である。覆土中には縁が数個含まれていた。

土壤（第11図）

番 号	規 模 (cm)			平 面 形	断 面 形	出 土 遺 物
	長 軸	短 軸	深 さ			
1号土塙	径 160		290	円 形	フラスコ	繩文中期土器片
2号土塙	径 200		204	円 形	フラスコ	タ
3号土塙	135	100	74	円 形	袋 状	タ
4号土塙	径 67	140		円 形	フラスコ	
5号土塙	90	70	88	楕 圆	フラスコ	
6号土塙	径 90		50	円 形	鍋 底 状	円盤状石製品
7号土塙	径 1.10		50	円 形	筒 状	繩文中期土器片 右ペラ状石器



第8図 1号竪穴状遺構



第9図 2号・3号竪穴状遺構

出土遺物（第16図）

6号土塚出土遺物（4）

円盤状石製品1点が出土した。鍛を丸く打ち欠いて作り、アスファルトが少量付着している。

7号土塚出土遺物（3）

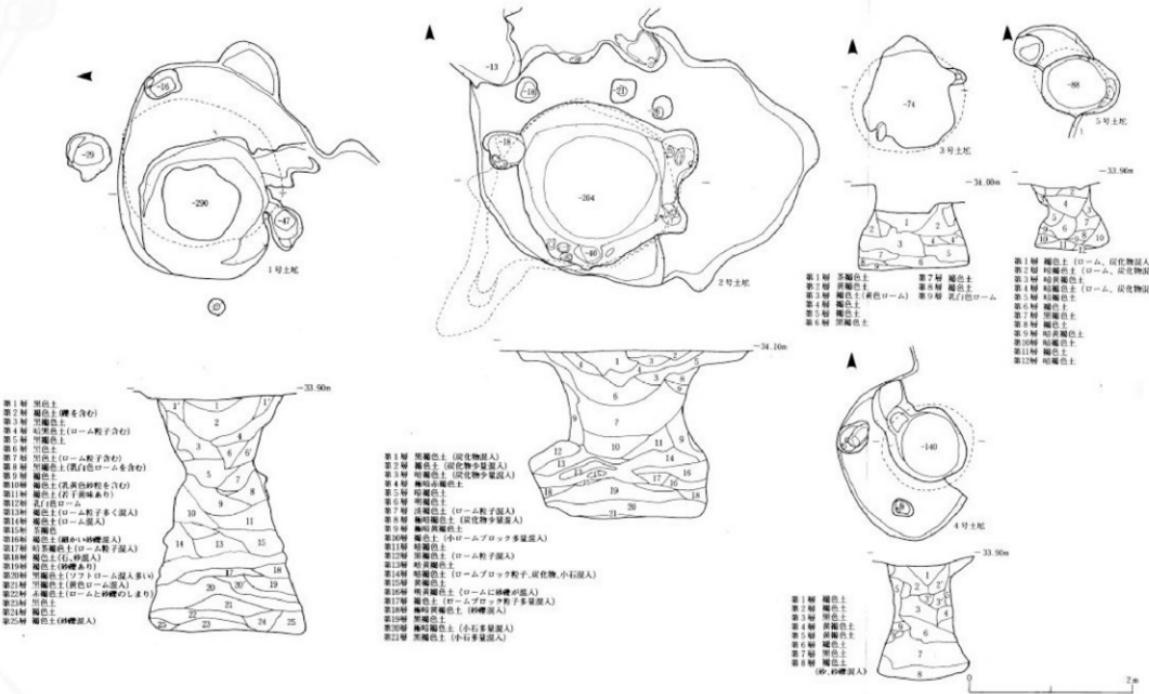
ヘラ状石器1点が出土した。細かく両面剥離を施し刃部を作る。頁岩である。

1号ピット出土遺物（第10図）

ピット内から出土した完形土器である。口径21cm、底径7.5cm、器高19.5cmを計る。口縁部が内傾する深鉢形土器である。口唇部に刻みが施され、下に3条の平行沈線がめぐるが、3本目は途中で切れる。5カ所に二個一対の突起が付される。地文はR.L.の横位回転の斜繩文である。



第10図 1号ピット内出土土器



第11回 土 塚

遺構外出土土器（第12・13・14・15図）

遺構外出土の土器を施文様から、時期ごとに群に分け、さらに類別して述べる。

1群土器

1類（第14図1～3）

細い粘土紐を貼付し、半截竹管状工具により擬似爪形文を施す土器で、地文には羽状縞文もみられる。

2類（第14図4）

口唇から口縁部に貼り付けをもち、口縁部には、半截竹管状工具による沈線が山形に付される。頸部には、半彌起線文が施される。

2群土器

1類（第14図5）

口縁、頸部に隆帯を貼付し、さらに縦に連絡する隆帯を施している。間には撲糸压痕文による擬似爪形文が施される。

2類（第14図6）

山形口縁をもち、それに平行して隆帯、沈線を施している。隆帶上に刻み目を施す。

3類（第14図7）

地文の縞文に細い粘土紐を貼付し文様を展開させる土器である。

4類（第14図8～15）

口縁部がやや外傾し、無文帶となるものや、沈線で削消し部と縞文帶を画すものがある。また刺突の施されるものもある。

3群土器（第13図1・2、第14図16～24）

沈線を主体に文様を展開させてるもので、隆線に刻み、刺突をもつもの、流水状に櫛目文を施すものなどがある。

4群土器

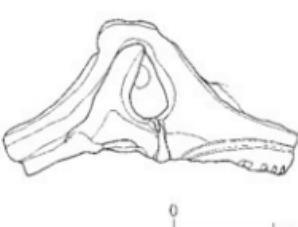
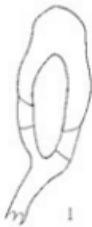
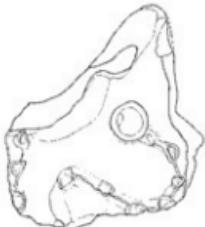
1類（第14図25～29、第15図30）

口縁部に半齒状文をもつ土器である。

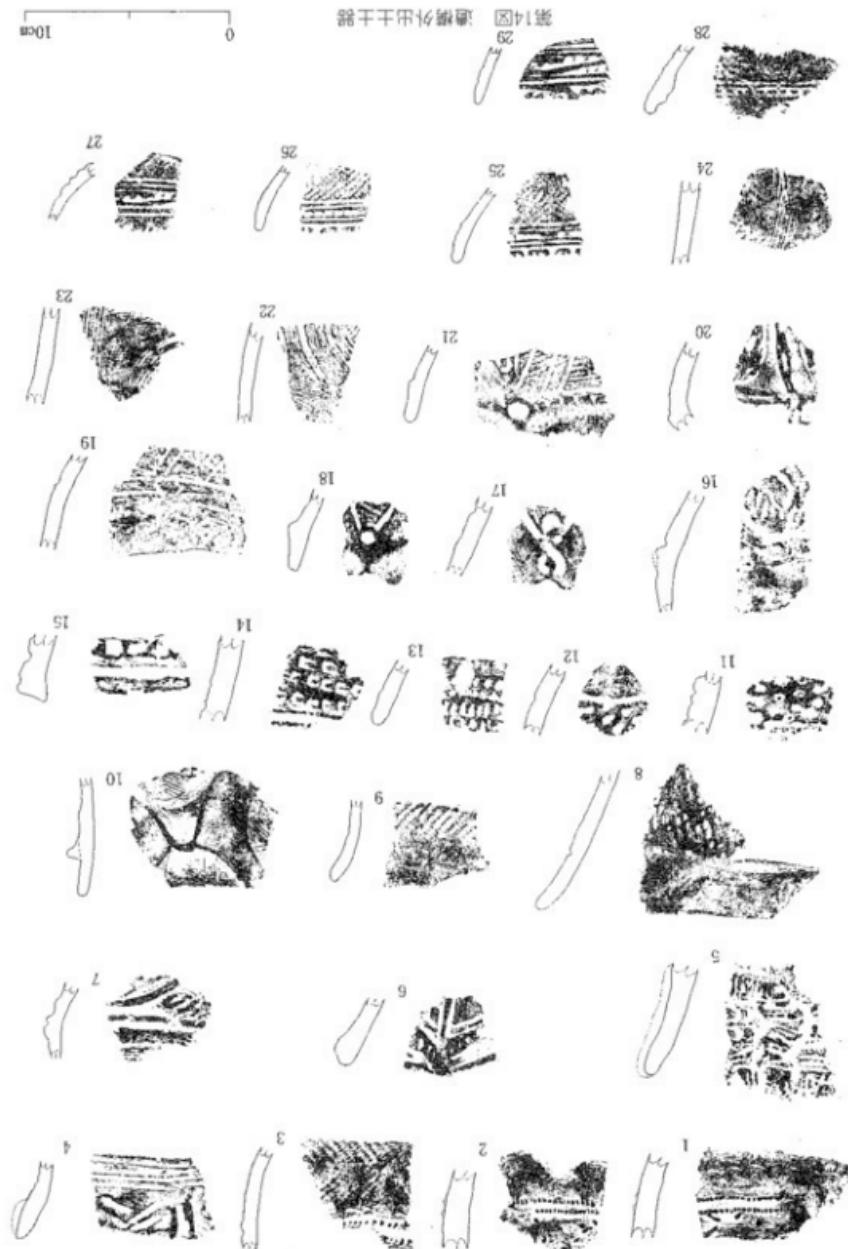


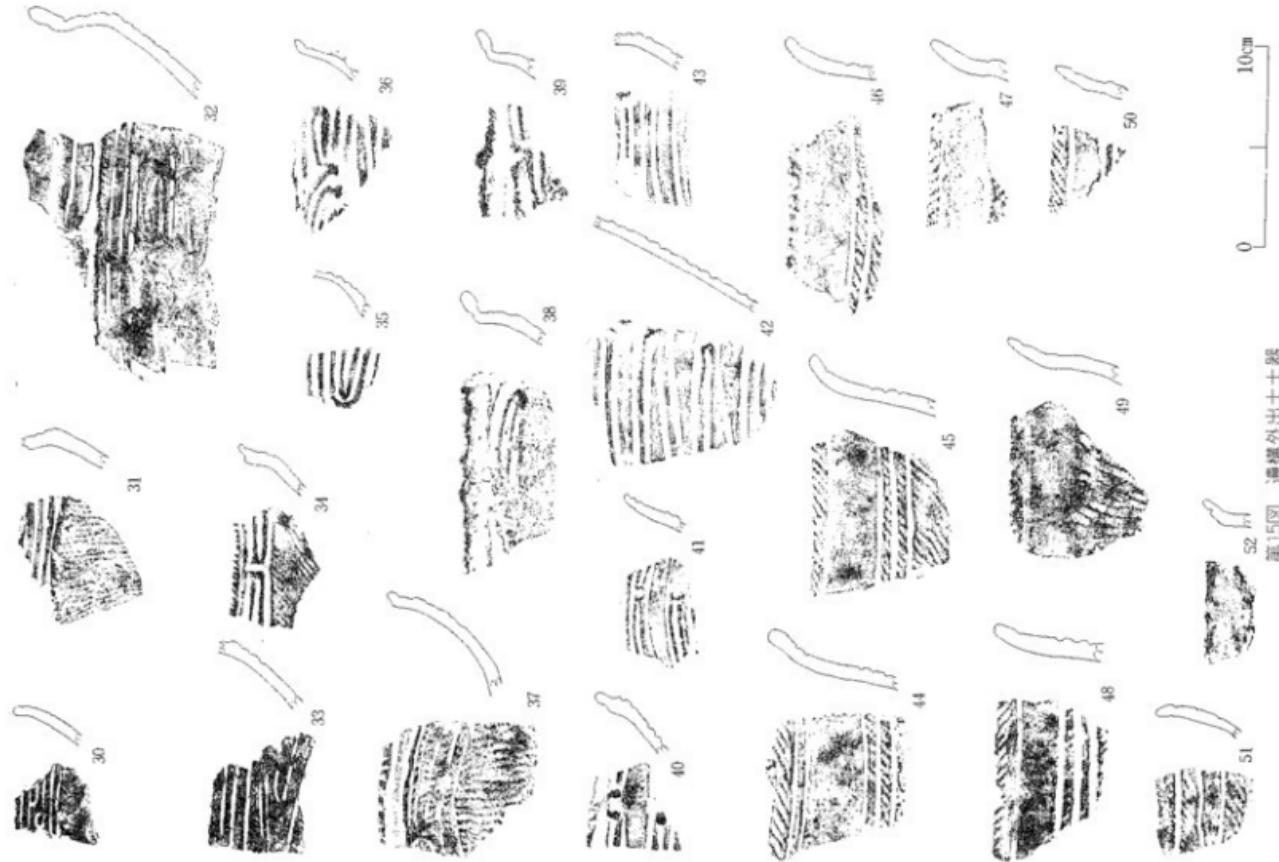
0 5cm

第12図 遺構
外出土土器



第13図 遺構外出土土器





第15图 通柳外出土土器

2類（第15図31）

口縁部に平行沈線文を施す土器である。

3類（第12図2、第15図32～34・37～41・43）

工字文を主とする土器群である。沈線で描出するもの、二個一対の突起で連絡させるものなどがある。口唇部に刻みをもつものもある。

4類（第15図35・36・42）

変形工字文を施す土器である。

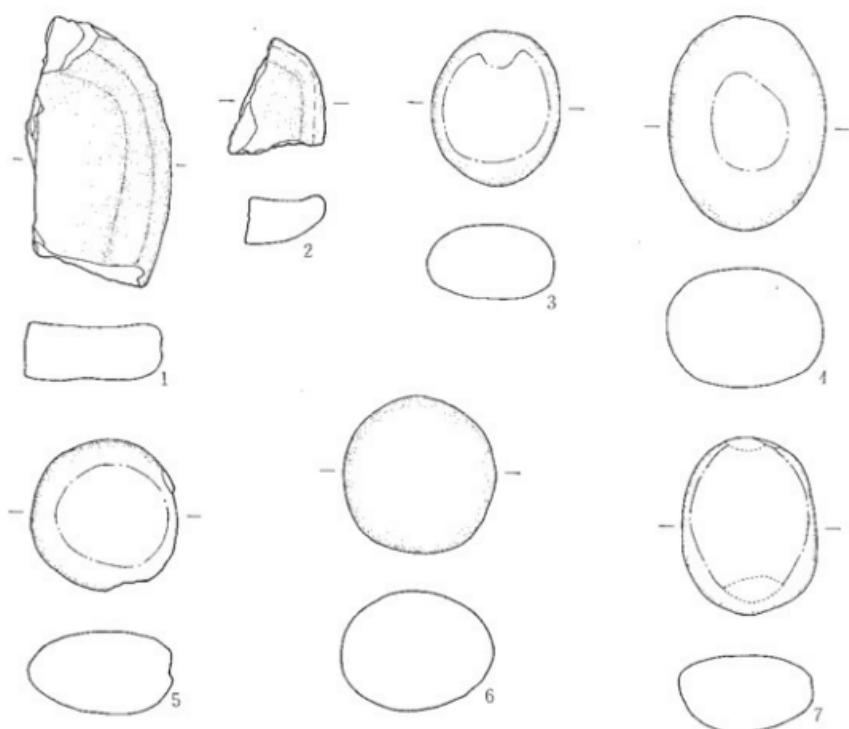
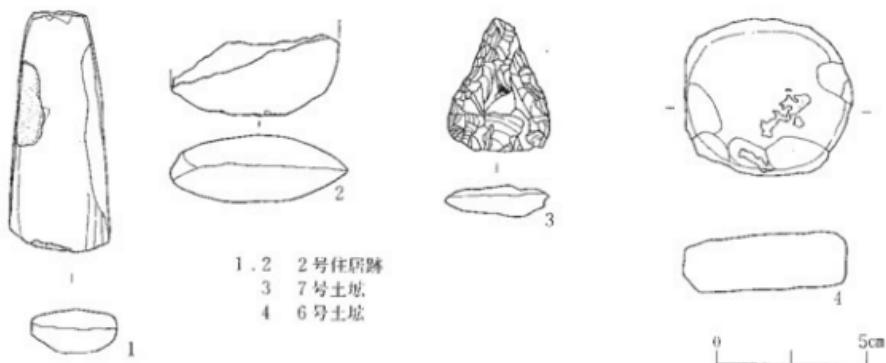
5類（第15図44～50）

広口の錐形土器である。口縁部に櫛文を残し、沈線が1～3条口縁下と頸部にめぐり、間は磨消し無文帯となる土器群である。

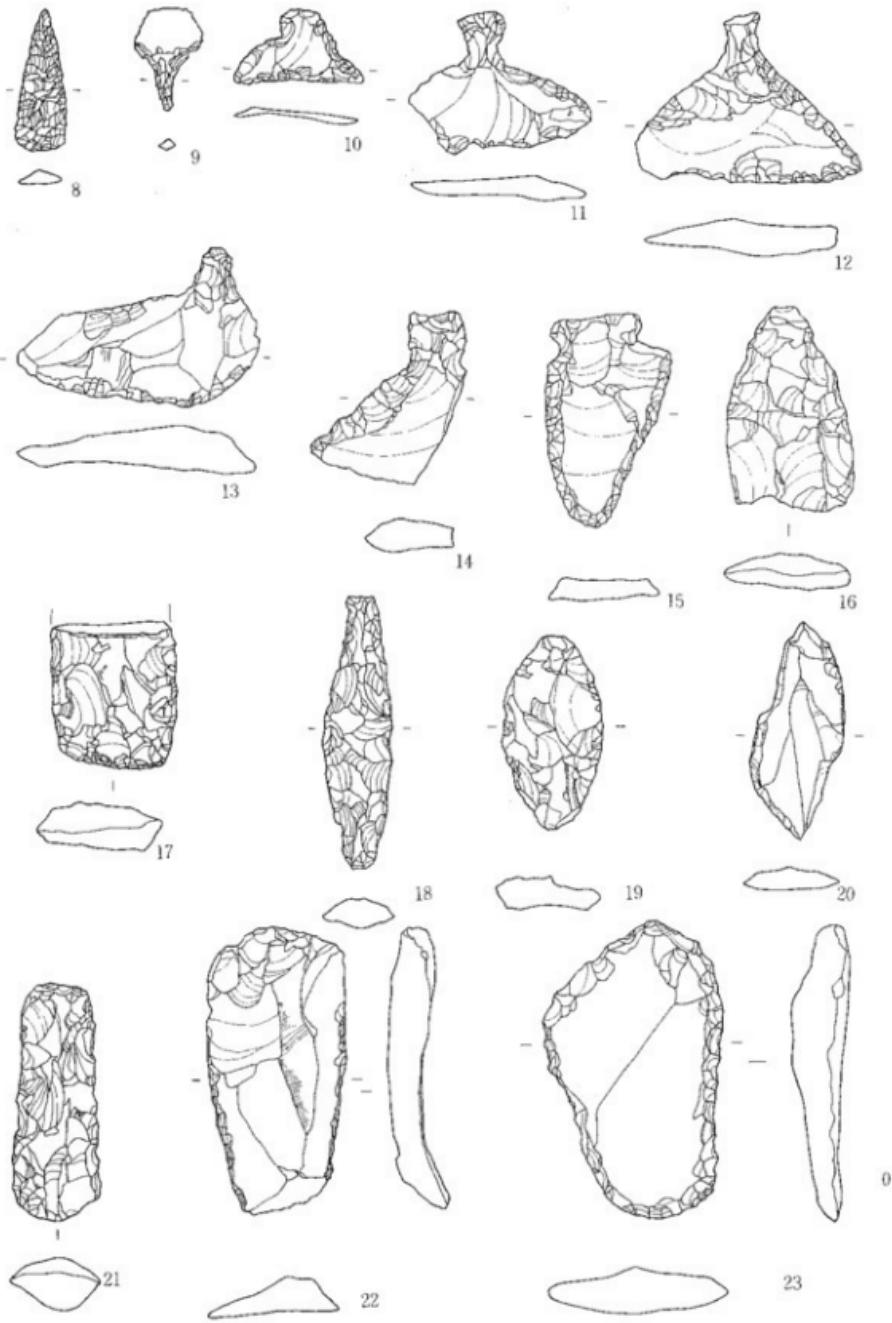
遺構出土石器（第16～18図）

石鎚は無茎の細長いもので頁岩である（8）。9は石錐で上面に自然面を残している。10～15は石匙である。10～14は横型、15は縦型である。13は片面加工である。すべて頁岩である。9～12・14は両面加工で刃部を作るヘラ状石器である。すべて頁岩である。22・23は比較的大きな剥片を素材として片面剥離で刃部を作り出している搔櫛で、石質は頁岩である。24は長さ4.6mを計る小形磨製石斧である。25～28は磨製石斧で、26は全体に細かい擦痕がみられる。22は石剣の破損品である。表面に刻線がみられる。31・32は打製石斧である。1・2は石皿で2個とも欠損している。1の凹面はきれいに磨かれている。石質は安山岩である。3～7は磨石である。

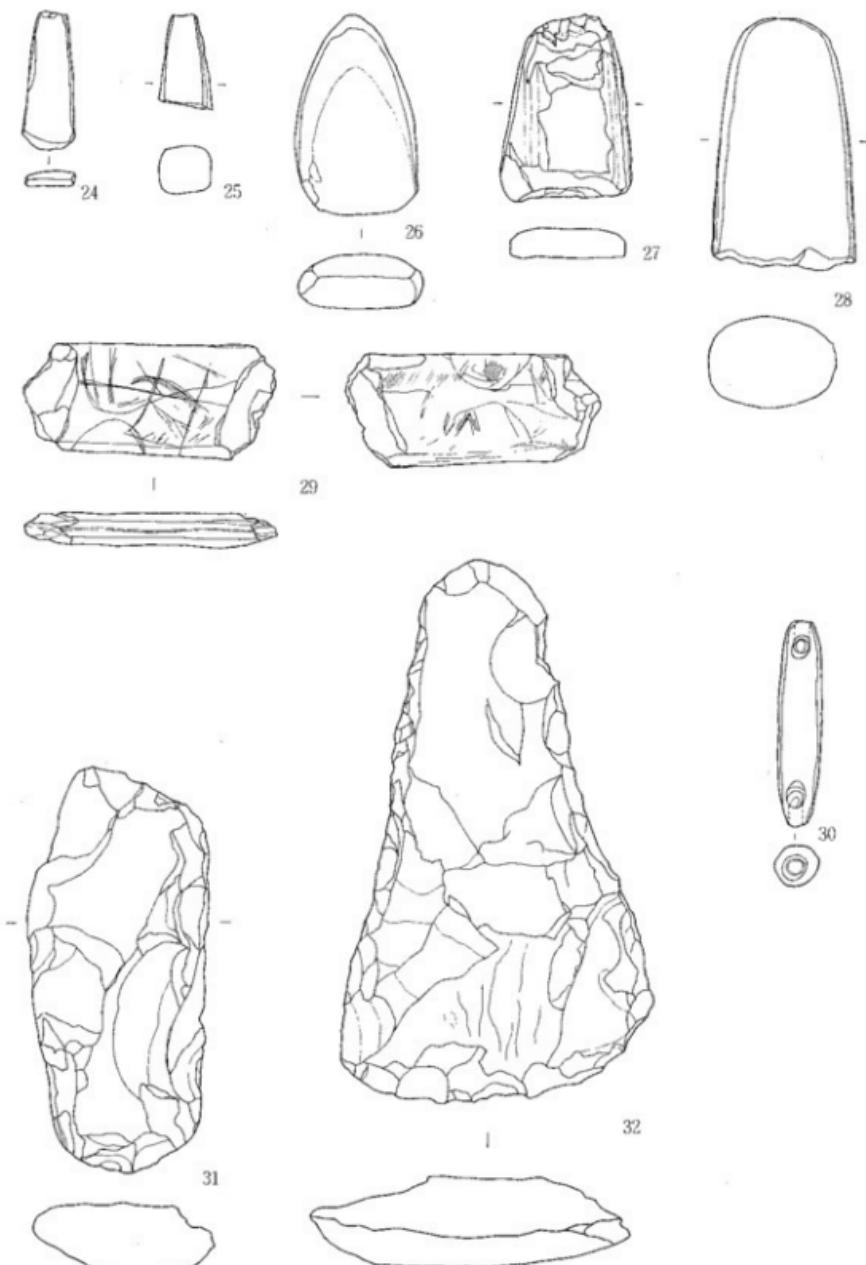
石製品（30）：両端に孔を穿っている。装飾品であろう。



第16図 遺構内外出土石器



第17図 遺構外出土石器



第18図 遺構外出土石器

0 5 cm

まとめ

遺構について

湯ノ沢H遺跡は、北に小さく張り出す台地である。今回の調査では中央部、西、南側の畠地にもトレチを設定して調査を実施したが遺構の確認はできなかった。本遺跡では、台地先端の縁辺部にのみ遺構が検出できた。しかし、非常に小規模である。

遺跡は、縄文時代中期、晚期の複合遺跡である。晚期の遺構は表土下の黒色土から掘り込まれており、表土除去作業の際に一部壊された可能性がある。発見した遺構は前述した通り、縄文時代中期の堅穴住居跡、堅穴状遺構、土塙、晚期の炉跡、土塙等である。台地の形状などから他に遺構が広がる可能性はきわめてうすく小規模集落のようである。

縄文時代中期住居跡の時期は、1号住居跡が埋設土器、2号住居跡床面出土土器から中期末葉大木10式期に位置づけられる。

遺物について

遺構内外出土の土器は出土量が少なく、拓影図として図示し得たものも非常に少ない。

出土遺物は、先に1群から4群土器まで大きく分け、さらに類別して述べた。ここではそれらを編年的に位置づけてみたい。1群土器としたものは縄文時代前期末葉の土器であり、1・2類とも大木6式に比定できるものであろう。2群土器は大きく縄文時代中期の土器である。1類は円筒上層B式、3類は大木8a式、4類8~12は大木10式に比定できると思われる。3群土器は縄文時代後期初頭の上器群を括した。第13図1・2は門前式に併行するものと思われる。4群土器としたものは縄文時代晚期の土器である。1類は大洞B C式、2類は大洞C式、3類大洞A式、4類は大洞A'式にそれぞれ比定されるものであろう。5類とした、口唇部に縄文を残し、頸部に磨消し無文帶をもち、下部に数条の沈線がめぐる變形の土器はあるいは弥生時代に位置づけられる可能性がある。

参考文献

芹沢長介、坪井清足他：「縄文土器大成、第2巻中期」講談社 1981

秋田県教育委員会：「秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書、駒坂袋1遺跡」

秋田県文化財調査報告書第92集 1982

秋山市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」 1983



第19図 遺構配置図